ヴィーザルの復讐

あるばさむ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〝螺旋の樹〟の騒動から約一年。十数名の神機使いが突如武装蜂起し、あるアーコロジーが襲撃された。

制圧と同時に全世界へ配信された映像の中で、反抗勢力〝ヴィーザル〟は母体組織である〝フェンリル〟に対して全面戦争を宣言。要求は何も無く、「殺したいから殺す」とだけ告げられる。さらに数時間後、総本山であるフェンリル北欧本部が陥落したとの報が、世界中の支部へ伝えられた。

彼らは宣言通りに世界各地で戦渦を拡大させる。拠点襲撃、人命の損失、ついには民間人をも徴用するなど、世界を巻き込む戦争状態が勃発。

事態の収束を図るため、フェンリル極東支部第一部隊所属エリナ・デア＝フォーゲル
ヴァイデは〝ヴィーザル〟首魁と接触。
彼らは告げる。
かつての、アラガミのいない世界を取り戻す。
それは世界を救う希望であり、世界を滅ぼす詭弁であった。

神は天に在り、世は全て事もなし。

＊＊＊＊＊＊

「GOD　EATER　3」発売記念！

目次

序 —— 1
平穏の一刻 —— 9
暗雲 —— 36
雷の声音 —— 67
ＥＮＧＡＧＥ ＯＮ ＤＥＳＥＲＴ 91
其は善意か、悪意なりや —— 120

序

ＷＥＬＣＯＭＥ　ＴＯ　【ＮＯＲＵＮ】ＡＲＣＨＩＶＥＭＥＮＴ　ＤＡＴＡＢＡＳＥ．
＞ＩＤ［＊＊＊＊＊＊＊］
＞ＰＡＳＳ［＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊］
＞ＥＮＴＥＲ
＞ＬＯＧＩＮ
＞Ｍｏｖｉｅ―Ｆｉｌｅ８０３５―２０７５／０３／１５Ｍｏｎ―１１：１６
＞ＰＬＡＹ？
Ｙｅｓ《Ｙ》　／　Ｎｏ《Ｎ》

……………………。

紅々と燃ゆる瓦礫と、数多の大小様々な悲鳴が再生された。

そこはかつて町だったらしい。らしいというのは、辛うじて民家の残骸だろうと判断できる炭屑の山があちこちに散見されるためだ。それらも映像の再生時間が進むごとに己の形を維持できなくなり、次々と崩壊していく。画面の端から端までを埋める火炎が、物体の燃焼可否を問わず、何もかもを喰い尽くしていく。

町があり、家があるならば、人間が住んでいたはずだった。だが、この町の住民の生存予測は目を瞑りたくなるほどに希薄だった。声はすれども姿が見えない。大抵は炎に巻かれ、虚しく抗った末に黒焦げになっていった。四十メートルほど先に、まさに地獄の業火というものに呑み込まれ、絶叫する誰かが映った。

地獄。

そんな簡単な単語で表すことが許されるなら、そこは確かに地獄だった。人が死に、町が燃え、命が簡単に煤けていく。積み上げた営みが焼き払われ、滅ぼされ、失われていく。

何もかもが壊される。

理不尽に害為された者は誰もがこう思っただろう。

何故、と。

否、この時代の人間はある意味で理不尽に慣れている。世界は荒ぶる神に陵辱され、侵略され、喰い散らかされている。彼らは人智の及ばぬ怪物の隣で息を潜めて日々暮ら

すことを余儀なくされ、それでもようやく、安寧とは程遠いにしても、せめてもの水準の生活は確保した。それがこの、壊された町の元々の在り様だった。
ならば今更問うまでもない。ここに住んでいた人間は皆、怪物に脅える日々からの解放を願い、叫びつつも、どこか諦観していた。
怪物に殺された奴は確かに気の毒だ。だが、それは、運が悪かったからこそ、起こるべくして起きた悲劇だったのだ、と。
一般人の力を遥かに凌駕する化け物がそこらじゅうを闊歩している現在。安心安全が保障される場所など、世界のどこにもありはせず、だからこそ仕方のないことだったのだと。危険と隣り合わせの彼らは、図らずも、死というものへの絶望を知らず植え付けられていた。
だから、今更問うても仕方がない。答えが返ってくる頃にはどいつもこいつも喰い殺されている。そういうことの象徴、具現が歩いているからこそその怪物なのだから、と。
そう。
だから。
だからこそ、彼らには理解できなかった。だからこそ、問わずにはいられなかった。
路傍の死体、生気を失った眼に怨みがましさを点すのも忘れ、まずはその疑問への回答を何よりも求めている。瓦礫に圧し潰された細い腕が、去り行く背中に縋るように伸

ばされている。
何故。
なぜ。
どうして。
貴方達が、そこに立っているのか。

カメラが持ち上げられ、画面が雑に振り乱れる。誰かがこの機材を発見し、その状態を検めているのだろう。やがて電源が入りっぱなしであることを確認したのか、発見者は敢えて映像録画を中止せず、そのままレンズを進行方向に向けた状態で歩き始めた。
周辺の景色が後方へと流れていく途中、付属の指向性マイクは、炎が家々を焼いて爆ぜる音や、画面の揺れに併せて刻まれる足音、四方八方から響く悲鳴、大降りの刃物が肉を切る音、銃声と同時に途切れる断末魔、その他様々な音を拾い続けていた。
やがてカメラの持ち主は、町の広場だった場所に行き着く。同時に地面を踏み均すような音が起こり、しばらくの後に、カメラはその平らになった場所にそっと置かれた。
レンズは広場のシンボルだった噴水を映している。
その画面端に、人影が入った。
砕かれ、岩塊と化したそれに、人影が腰を下ろす。背後で燃え盛り続けている炎の逆

光で顔は見えない。
　口を開く気配。そして間もなく、周囲の様々な雑音に明確な言葉が加わった。
「同僚諸君。俺達は、もはや首輪に繋がれた狼じゃあない」
　人影の主、恐らくカメラを持って運んだ本人は、あたかも向かいの席の友人に伝言を届けるような気軽さで声を発していた。男の声だった。
「時は来た、と言っているんだ。角笛から鳴り響くこの美しい音色こそ何よりの証拠。太陽と月は飲み込まれ、道化と番犬は楔から解放された。虹の橋は壊れ、海原は巨蛇と亡霊の船で溢れ返る。かつて血を分けた兄弟同士の殺し合いが始まる。天地を支える大樹は焼き尽くされ、生命の悉くがリセットされる。意味が解るか？　かつて行われようとした半端な『終末』なんかじゃない――『黄昏』は、とうの昔に始まっている」
「フェンリル、世界の統率者、我が尊き同僚達。そう、お前達が神を喰い殺す狼だというならば、俺達はお前達の顎に右手首を差し出す者、そしてその図体ごと切り裂く剣の持ち主だ。神話の悪魔を名乗るぐらいなら、その由来の顛末も知っているだろう？　訳が解っていない馬鹿は今すぐ勉強し直すか世界ごと死ぬまで呆けているがいい。いずれにせよ時間は残り少ない。俺達も気の長い性分ではないしな」
「端的に言おう、フェンリル。お前達からすれば、俺達の扱いは現時点を以て反逆者、背任行為を犯した大罪人ということになるだろう。それで構わない。それでこそ、お前達

には俺達を誅する大義名分が与えられる。そして俺達は、それすら望むところだと笑い飛ばせる大馬鹿者の集まりだ。解りやすく説明するなら、――こういうことだ」
「俺達は、アラガミを殺す神喰らい（ゴッドイーター）。そして同時に、同僚（ゴッドイーター）を殺す、殺人鬼（ゴッドイーター）だ」
「これより俺達は世界各地に点在するフェンリル支部及び拠点を襲撃し、物資を略奪、防衛に当たっているゴッドイーターを軒並み殺して廻る。無理も無茶も承知の上、それを可能にするための力が俺達にはある」
「これから始まる殺戮は前座に過ぎない。この光景すら余興、デモンストレーションの一環だ。これからこんな地獄が世界各地に広まる。だが、俺達はお前達に何も求めていない。殺したいから殺す。殺さなければならないから殺すだけ。シンプルに、ただそれだけだ」
「ただ、ひとつだけ。――俺達の望みは、かつての平和。この世からアラガミを滅ぼし、穏やかな日常を取り戻すために戦っている。その血を受け入れた同胞も含めて、俺達は全てを、この地獄から救う」
「さて、全国各地の同僚諸君、特にその中でも選りすぐりの『魔人』ども。俺達を止めたければ最大の策略と火力を用意しておけ。チンタラしてても死人が増えるだけだ。無抵抗のまま殲滅されたいってんならこっちとしても気楽で有り難いもんだが、お上の連中はそれを許さんだろう。情報管理局は今頃大慌てかな？　どうあれお前達は、俺達と

一戦交えることになる。まだ見ぬ友よ、互いに顔も知らない間柄だが、殺し合える時を楽しみに待っていてくれ。足りない己を自覚している奴はせいぜい腕を磨いておくことだ。それら全て悉くを俺達は凌駕し、殺し、勝利し、その度に望みへ近付くことだろう」

「……始末に追われる役人が早速お出ましか。いいだろう、今日はここまでだ。これから世界は多少混乱するだろうが、心配は要らない。敵がもう一つ増えるだけだ。アラガミに対して自衛してきた今日これまでの順応性があれば、すぐに慣れる。それと、断っておくが俺達は無益な殺生は好まない。必要な飯は貰っていくし、邪魔する奴は殺すだけだが、それ以外は基本的にノータッチだ。そこを踏まえて、俺達の処遇に頭を捻るがいい」

「それではさらばだフェンリル諸君。俺達は〝ヴィーザル〟、死を厭わない喰人鬼（マンイーター）。黄昏時、ヴィーグリーズの野で会おう」

……………………。

この映像が最寄の支部に転送され、データーベースに最重要機密のセキュリティーロックをかけて保存された、二十七分五十一秒後。

旧北欧フィンランドに位置するフェンリル本部が武装勢力により奇襲を受け、僅か数十分で陥落した。

世界恐慌が始まる。

平穏の一刻

「フランさん。先輩……〝ブラッド〟隊長はミッション中ですか？」
　カウンターで忙しなく業務をこなす受付嬢に、少女が問いかけた。
　金髪をボブカットにした涼やかな女性は、その少女に微笑みかけながら答える。
「ええ。彼らは現在、旧チャイナの内陸部で難民移送の警護中です。本日一五〇〇には目的のハイヴに到着予定ですので、帰還は明日の昼頃になるかと」
「そうなんですね。うーん、ミッション付き合ってもらおうと思ったんだけどな」
　白のベレー帽を被る少女は不服そうに頬を膨らませた。
　見た目はまさに育ちの良い令嬢で、鉄板の床や仰々しいモニタが並ぶこの場所には少々そぐわないようでもあるが、不思議と馴染みのある雰囲気でもあった。
　当然のように、フランと呼ばれた受付嬢――フラン＝フランソワ＝フランチェスカ・ド・ブルゴーニュも、手を止めないまま自然に会話をしている。
「あの辺りは最近になって感応種の観測報告も増えています。対抗し得る神機使いも極東支部の面々に限られていますからね。そういうエリナさんも、これから出動予定では？」

「そのメンツが足りてなくって。単純な掃討任務ですけど、コウタ隊長とエミールは別任務に行ってるし、防衛班の人達に頼るわけにもいかないし。……よく考えたらどうして私だけ別行動なんだろ」
「彼らも護送任務中でしたね。エリナさんは、もう単独でのミッションでも充分活躍できる実力者ですから。コウタさんも安心してここの留守を任されているんだと思いますよ」
「いえ、まだまだです。先輩とか〝ブラッド〟の人達に比べれば」
「あの方々はあまり比べる対象にしてはいけないような……」
　二人が話に花を咲かせている間にも、フランの持ち場であるカウンターには人の往来が絶えず、オペレーターといくつかの事務手続きを済ませてはエントランスを離れていく。その全てが一様に、男も女も隔たりなく、右手首に仰々しい赤の腕輪を着けていた。
　昼日中（ひるひなか）の時間ということもあり、彼女も忙しそうだ。エリナはその場から立ち去ろうとした。
「ともあれ了解です。テキトーに暇そうな人を捕まえます」
「アサインは一時間後ですので、よろしくお願いします。それと、もう少しで私も交代なので、ご一緒にランチでもいかがですか？」
「はい、是非！　また後ほど！」

会釈を交わして、エリナはカウンターから離れた。すぐ脇にある階段を駆け上がり、フローリングの敷かれたデッキに上がってターミナル端末に向かう。支部内システムのメールで、暇な知り合いをどうにか探さなければならない。とはいえここ最近の慌ただしさでは、なかなか手が空いている人間も少ないだろう――。

禍々しい狼の意匠を掲げる旗のもと、今日もフェンリル極東支部は多くの人間で賑わっていた。

東の果てに浮かぶ島国。海の近い地方の一角こそ、少女が身を置く人類最後の砦である。

●

人類史上最大にして最悪の発見である〝オラクル細胞〟によって、過去の歴史は無意味になった。

この細胞は、プラスチックから果ては核爆発まで、とにかく「何でも喰う」。それそのものは単細胞生物に過ぎないが、ある時を境にそれらが群体として結集し、一個の生物の形を取った。特質である無差別な食欲をそのままに、自由闊達に動く脚を得て、より多く大きく万物を捕喰する口を得た群体生物が、世界中に溢れ返った。

細胞そのものが接触物に対して浸食するような機能を果たすため、例え口腔ではなくとも皮膚に触れた物は捕喰される。つまり、攻撃目的で叩き込まれる刃や銃弾も飲み込

むかのように無効化される。それまでの戦闘手段が一切通じない怪物を相手に、人類は次第に為す術を失っていき、遂には八方塞がりになった。

尋常な攻撃を意に介さない肉食動物と、牙も角ももがれた草食動物が相対すれば、結果は目に見えているだろう。

人類のカーストは瞬く間に地に落ちた。武器を喰われ、家を喰われ、家族を、友を、恋人を、最後には己を喰われた。何もかもが無惨に喰い散らかされた。

単細胞分裂で無限に増殖する怪物は食欲のままに蹂躙を続けた。最悪なことに、オラクル細胞は捕喰を繰り返すことによって、対象の性質や特徴を自身に反映するという能力があることも、この頃になって発見された。

禍々しく進化していく正体不明の天敵。無慈悲にして手を付けられない暴虐ぶりから、人々は怪物に名前を付けた。

世界に終焉をもたらす使者、荒ぶる神――〝アラガミ〟。

そういった文明の崩壊、新たな激動の時代が始まったのが二十年前。

間もなく発足した世界最高指導機関〝フェンリル〟は、やがて多くの犠牲の上で一つの成果を得る。

オラクル細胞で構成されるアラガミに対し、通じるのは同じオラクル細胞による捕喰行動だということ。これはアラガミ同士が共食いをしている光景を偶然に観測したこ

とから、研究を進められていった。

毒を以て毒を制す。オラクル細胞をオラクル細胞で喰い破る。滅びかけた技術の粋を集め開発されたのは、アラガミと同じ性質を持つ〝神機〟と呼ばれる武器。長き絶望の時代の中、人類がようやく垣間見た光だった。

試作機は単に丸め込んだオラクル細胞をピストル型神機に詰め込んで撃ち出すだけの粗末なものだったが、それでもアラガミには通じるという成果を得た。反撃というにはあまりにも小さく、しかし確かな希望を確信し得る成果だった。

比較的小型のアラガミを集中的に攻撃し、どうにか討伐まで至り、そこから採取した素材を基に、神機は進歩（アップデート）を重ねていく。より確実な成果を得るため、次なるコンセプトとして採用されたのは、武器の中にアラガミを組み込み、あらゆる動作を制御することだった。

あの怪物と戦うにあたって、攻撃を担う刀身（ブレード）と銃身（ガン）、防御を担う盾（シールド）が必要とされた。アラガミの細胞群の中でも指令塔の役割を持つ器官――コアを基に疑似的なアラガミを製造し、幾重もの安全装置で雁字搦めに縛り付ける。これを本体の制御機構とする。

肉体を喰い千切る刃も、蜂の巣のように射抜く銃弾も、全てオラクル細胞を実用化する技術で作られた。戦術的見解から近接用と射撃用に分けられ、本体制御機構と組み合

わせた結果、余りのアンバランスさにそれこそ異形と呼ばれかねない仕上がりになってしまったが――これこそ人類の新たな武器、その基本型として確立される〝第一世代神機〟だった。

時代を経るごとに、近接と射撃のどちらも一機で運用できる可変型第二世代、新種のアラガミにも対抗し得る第三世代と開発されていく。その頃にはアラガミに対して為す術の無かった時代とは違い、有効に戦えるだけの力を得ていた。

何より特徴的なのは、討伐したアラガミの素材を回収するための機構。神機の制御機構が変形して露出する、獣の顎のような異形そのもの。

生命活動を停止したアラガミは細胞片となって塵のように霧散してしまい、手作業で解体するということが至難だった。これを解決するため、肉を噛み千切りコアごと摘出するために開発されたのが、捕喰形態（プレデターフォーム）と呼ばれる機構である。

神とすら揶揄された怪物を討ち果たし、その屍肉を喰らう彼らの姿は、やがて別の俗称を用いて呼ばれることとなる。

神を喰らう者（ゴッドイーター）。

それが新たな救世主の名前だった。

そうして、幾度となく侵略と反撃が続いた、二〇七五年。

何の因果か、様々な策謀と強力なアラガミに悩まされ続けてきたフェンリル極東支部

は、相も変わらずアラガミの討伐に追われる日々を送ってはいるものの、ほんの僅かながら平穏と言っても良い期を受け入れていた。
二〇七一年、極東支部近海に浮かぶエイジス島を中心に勃発した『アーク計画事件』。
二〇七四年、触れる者全てに不治の病を植え付ける『赤い雨』。同年、極致化技術開発局〝フライア〟の支部責任者を含む最高幹部らによるクーデター。それに併せて発生した『終末捕喰』の完成として象徴化しつつある〝螺旋の樹〟。
世界中に蔓延るアラガミの大半が群れとなってこの狭い島国に押し寄せ、それらを斃し続けた神機使い達の奔走が、全霊の尽力によってようやく落ち着いてきたのだ。
多くの人々が思うように、この極東では色々なことが有り過ぎた。事件の裏は多分に隠蔽されているとはいえ、知らされている事件はいずれも世界を丸ごと滅ぼしかねない規模のものだった。文字通り、歴史を何度かやり直せるほどに濃いものだ。
ここらで少しぐらいは安寧があっても良い。
無論、日々の暮らしを脅かすアラガミは絶滅などしておらず、一切の油断を許さない状況には変わりないが、そうであろうとも、ルーチン通りの生活がどれだけ有り難いことか、特に極東の住民達は痛感している今日この頃だった。

●

〝螺旋の樹〟を取り巻く事件が収束し、世界が一度滅びかけてから、あっという間に

一年が経った。

極東支部第一部隊に所属するエリナ・デア＝フォーゲルヴァイデの日常も、少しずつ変化が現れ始めていた。

彼女が配属された後にやってきた新世代の部隊〝ブラッド〟の面々、特に現在の部隊長と出会ってからというもの、エリナは以前よりも己の実力というものを冷静に見極められるようになりつつあった。

かつては優秀な神機使いで、今は亡き兄の背中を目標に、己もまた神機使いとして邁進することを至上命題としてきた。当時ロールアウトされたばかりの新型神機を極東支部で初めて取り扱うテスターに立候補し、兄に追いつくためにがむしゃらな努力を続けた。

未熟さを痛感しては歯噛みし、訓練と実戦を積み重ね、しかしエリナは成長を実感できずにいた。同僚のエミールは無闇に腹の立つ奴だし、直属の藤木コウタ隊長もなんだか甘ったれているように見える。自分にも他人にも苛立ちながら、苦悩する日々が続いた。

そんな中、ただでさえ脅威判定の高いアラガミが数多く観測される極東支部に〝感応種〟と呼ばれる新手が現れ、加えて無差別に死者を生み出す忌々しい『赤い雨』が発生した。

アラガミだけならともかく、異常気象は神機使いでもどうしようもない。未曾有の脅威を前に、対抗し得る力を持つという部隊が極東に合流した。

極致化技術開発局〝フライア〟が擁する新世代の神機使い達、〝ブラッド〟。

曰く、神機使いの内に眠る潜在的能力〝血の力〟を引き出し、これまでの神機使いよりも高度な戦果を実現するという、新進気鋭の部隊。

彼らの活躍は目覚ましいものだった。現行の神機を機能停止させる特殊な磁場を発生させる感応種に対して、後に〝ブラッド〟部隊長となる人物の〝血の力〟はその磁場を払いのける能力を覚醒させた。効果は周囲の神機使いにも、潜在的能力を〝喚起〟させる力を持っていた。それこそが鍵となり、最前線である極東支部所属の神機使いはかの人物と作戦を共にし、まるで迷い道にある自分の手を引かれるように、感応種を撃退する実力を身に付けていった。

エリナもその一人である。己の実力が足りないばかりに苦渋を重ねていた自分を導いてくれたのが、あの人だった。以来エリナは親しみを込めて「先輩」と呼んでいる。かの人物と共にした任務は、変わり映えしない戦闘ばかりであるはずなのに、肌で感じ学ぶことが多かった。

否、それはエリナ自身の視点が変わったからこその収穫だった。

神機使いは基本的に四人以下の小隊を組んで任務に当たり、そのためにはチームとし

ての戦術が不可欠となる。
それまでのエリナは自分の実力を向上させるための利己的な行動ばかりだった。だからこそ、己の主義を至上とするエミールとは食い合わず、全員が生還するための戦術を組み立てようとするコウタ隊長とは対立することになっていた。
一方で〝ブラッド〟は元からチームワークを重視した立ち回りを意識しており、統率の取れた作戦行動は、知識としては解っていてもなかなか実践できない感覚だった。他部隊との共同作戦は想像を超える収穫を皆に与え、エリナもまた、尊敬に値する人物をまた一人得ることとなる。
視野は広く、思考は深く、それよりも手と足を早く動かす……言葉にすると滅茶苦茶な行動原理だが、かの人物はそれを見事に実践していた。おいそれと真似できることではないが、それこそが神機使いとして目指すべき一つの目標なのだと、エリナは思う。
極東において、もっとも濃密と言っていい一年間……それを過ぎて、エリナは今に至る。
あの時は自分のことばかりで気遣う余裕もなかったが、後になって振り返ってみれば〝ブラッド〟も思うところの多い一年を過ごしたことだろう。彼らの功績は大きく、しかし代償も大きい。それでも彼らは、この道を選んだ。あの「先輩」は、変わらずエリナの前に立ってくれている。それがとても誇らしくあった。

現在、エリナの所属する極東支部第一部隊は、主戦力としての役割である支部周辺のアラガミ討伐任務をメインとする傍ら、極東全域の気候変動に関して調査を依頼されている。依頼主はお馴染みの、極東支部長ペイラー・榊（サカキ）、そして彼の助手であるソーマ・シックザールだ。

極東支部を悩ませていた『赤い雨』の発生は、螺旋の樹発生と同時に観測されなくなった。榊とソーマ両名の見解によれば、『赤い雨』は俗説でしかなかった世界終末論『終末捕喰』の初期段階であり、引き金である〝特異点〟を精製するためのシステムの一部である、という。

詳細な話はオカルトじみた部分も含むためエリナも完全には理解していないが——『終末捕喰』とは、惑星の環境全てを、自らリセットするためのエコシステムであるらしい。

文字通り、人や動植物などの生命、自然や建造物など一切合切を完全消去し、初めから作り直す、惑星規模の自浄作用とも呼ぶべきもの。

その先触れであるのが『赤い雨』。あの不気味な赤い雲の起こるところに雨は降り、滴を浴びた生命は分け隔てなく死滅する。凶兆が再び起こることを、少なくとも見逃すことだけはないように、各支部の主力部隊に観測任務を預けているということだ。

エリナが本日この後に出発するのは、その依頼によるものである。通常の討伐ミッ

ションのついでで良いが、余裕があれば散歩がてら空を見てきてほしい、とは榊博士の言だ。現在の通信技術やモニタリング機材の性能があれば、目視での確認にはそれほど重きを置かないというのが一般的ではあるが、あの支部長はその限りではない。もとは技術開発の研究室出身であるらしい彼は、オラクルを応用する技術をここまで引っ張り上げた第一人者であると共に、現場主義の一面もあるようだ。

とはいえ、外部居住区のさらに外、オラクル装甲壁の向こう側――怪物の闊歩する無法地帯へ出征するわけだ。丸腰で歩くなどとんでもないことであり、神機を携行していても単独行動はあまり褒められたことではない。エリナ自身は別に構わないと思うものの、進んで規範に背くのも気が引けるし、自分を兄と豪語してはばからないエミールは特に口喧しい。余計な面倒ごとを避けるためにも、快く付き添ってくれる誰かが必要だった。

「とはいえ……どうしよっかな」

ターミナル機器を立ち上げ、展開したメールソフトを前にして、エリナはしばらく唸っていた。

神機の扱い、戦場での立ち回り、そういうものに慣れつつあっても、人付き合いというのは未だに難しいものがある。普段はエミールと馬鹿騒ぎをしていれば気は紛れるし、自分に良くしてくれる神機使いや職員などはいるが、特別仲の良い友達というのは

未だに少なかった。特にツーマンセルを組めるほど、信頼の置ける神機使いとなると、もはや片手の指で数えられるほどかもしれない。そのメンツもほとんど不在だ。
こういう時、あの「先輩」は便利だ。いや、尊敬する人物にそんな言い方も失礼だが、あの人は自分が困っている時には何であれ手を貸してくれた。エリナの特訓にも根気強く付き合ってくれたものだ。向こうも最近は特に忙しい身だが、久しぶりに二人で組んでみたいとも思う。
しかし、それは他の同僚達も同じなようで、通常任務の他にも雑用まで押しつけられるという、常に引く手数多の引っ張りダコ状態である。まったく、極東の危機を救った英雄様々というわけだ。
「……それも、甘えかな」
やはり多少の無理は承知で単独出撃するべきだろうか。エミールの説教は覚悟するとして、携行品などの準備を怠らず、いつも以上に警戒を緩めさえしなければ何とかなることではあるだろう。
腹を括ることにしたエリナは伝を当たることを諦め、さてフランと食事をするまでどこで暇を潰すか考え始める。出撃前の準備はほとんど済ませているし、一足先にラウンジでお茶でも飲んでいようか……。
ぷらぷらと足の赴くままに歩き出し、ランチメニューの魅力的な香りを漂わせるその

場所へ移動し始めた。

だが、

「――ふ、フランさぁん！」

「うわぁっ!?」

ラウンジに繋がるドアが目の前で開き、艶やかな黒髪を振り乱す女性が突然飛び出してきた。

ぶつかりそうになるのを慌てて回避し、その結果、女性は数歩たたらを踏んで、転びそうになるのを危うく止める。それからエリナの姿に気付き、

「あっエリナさん！　すすすまんですお怪我はないですか!?」

「え、ええ、私は大丈夫ですけど……どうしたんですかウララさん、そんなに慌てて」

否、この女性……星野(ほしの)ウララというオペレーターは、どうも根の性格上、そそっかしいところが抜け切らない。こんな風に取り乱しているのも、極東の人間にとってはいつもの光景ではある。

だが、その表情は見比べるまでもなく蒼白で、血の気が引いていた。これは自分がよほど大きなミスをした時か、オペレーター業に着任して間もない彼女でも解るほどの異常事態があった時に見せるものだ。どちらにしても、見る者の背筋に強制的な悪寒を走らせる。

「え、ええと、それどころじゃなくて、は、はやぐフランさんに教えねど、ととにがぐ来てください！」

「え？　あっちょっ！」

脂汗を浮かべるウララも自分で自分が解っていないようで、普段は隠そうとしている田舎訛りも隠せずに、とにかくエリナの手を反射的に引いて駆け出した。突然の連行に訳が分からず、もつれそうになる足をどうにか保ちながら、エリナもそれに追従することとなった。

階段を跳ぶように降り、つい今し方まで雑談していた受注カウンターに到着――するなり、ウララは自分の先輩でもあるフランへまくし立てた。

「フランさん！　たたたいへんです、テレビが！　じゃ、じゃっくされて！」

「……ウララさん、落ち着いてください。何かあったんですね？　では、正確な報告を」

まくし立てられたフランの方は対照的に冷静なもので、ウララの教育係でもある彼女の厳粛な言葉一つ一つに、ウララは条件反射的に背筋を伸ばした。お見事、とエリナは思う。

そうして深呼吸を一つ、自身を落ち着かせて、それでもなお悲鳴のような声を上げた。

「……も、モニター、見てください。あっちのテレビの方です！　ＦＢＳが、ジャックされてます！」

「……FBSが、ジャック？」

フェンリルが管理運用するTV放送局のことだ。報道、娯楽、神機使い募集のプロパガンダを目的としたもので、今や世界唯一の正式な放送チャンネルである。上司のコウタなどはよくアーカイブ放送を見るのに耽っており、そうでなくとも大多数の人間が数少ない娯楽として視聴している。

もちろん、フェンリルの提供である放送局なので、世界で最も信頼できる管理運用体制を敷いている。地方のアンテナで受信しているならまだしも、極東の中心でもある支部に外部からの割り込みが起こることはそうそう有り得ない。よほどの機材を使ってハックしているのか、そんな大仰なものを入手できるルートが民間に開放されているものだろうか。

エリナの疑問と同時に、その後ろから別の声がした。

「ただのジャックじゃありません。お二人とも、手元のモニターでもチャンネルは合わせられるでしょう。業務は中断して構いません。ともかくすぐに確認を」

赤毛を緩くまとめた、この中で最も先輩のオペレーターの女性。竹田ヒバリが、彼女もまた緊迫した表情でフランの顔を見た。

穏やかな人柄かつ仕事には厳格なヒバリまでもが深刻な顔をして言うものだから、ギャップに少し面食らったフランは、しかしすぐにコンソールを操作して地上波番組に

画面を切り替えた。
エントランスにも、ラウンジにも、波の寄せるようなどよめきが、少しずつ広がっていく。
「４ｃｈ……そう、それです。もっと音量上げて」
ヒバリの指示に迅速に従うフランの操作で、エリナもカウンターに身を乗り出すようにしてその映像と音声を認識した。
それは、録画された映像だった。
『――そう、お前達が神を喰い殺す狼だというならば、俺達はお前達の顎に右手首を差し出す者、そしてその図体ごと切り裂く剣の持ち主だ。神話の悪魔を名乗るぐらいなら――』
紅々と燃える瓦礫の町で、平坦な男の声が何の気なく響いていた。
声色は若く、背景の騒々しさに対して余りにも冷静だった。
周囲から拾われるノイズの主張が激しい。目にも痛い赤は火災の色、土も岩も人工物も見境なく焼き弾ぜる音。遠く木霊するように響くのは、ドップラー効果で曖昧になっているものの、喉も裂けんばかりの悲鳴だった。画面の端にちらちらと蠢く黒は、今ま

さに焼かれている人の影だろうか。男が腰掛けている大きな噴水の縁も半分以上が砕かれ、枯れているようだった。
そんな背景を、特に気にする様子でもない男は、訥々と演説のような文章を喋り続けた。
『端的に言おう、フェンリル。お前達からすれば、俺達の扱いは現時点を以て反逆者、背任行為を犯した大罪人ということになるだろう。それで構わない。それでこそ、お前達には俺達を誅する大義名分が与えられる。そして俺達は、それすら望むところだと笑い飛ばせる大馬鹿者の集まりだ』
明るすぎる火の手のせいで男の人相は逆光に隠れている。身じろぎもせず、ただ語るだけだ。火焔揺らめく映像の真ん中で静止する男の姿は、それそのものが燃え盛る最中を描く絵画のようだった。
だが、画面中に動きが加わる。炎の揺らぎの向こうに影が近付き、それは他の彷徨うような千鳥足ではなく明確な歩調で進み出てくる。ひとつ、ふたつ、――大小合わせて六つ。その内には、明らかにヒトではない形も含まれていた。
神機使い一人とオペレーター三人は、その人ならぬ形を瞬時に見抜いた。巨大な顎の開く頭に、図太い二足と胴、鬼面のような尾を持つ怪物。これでも部類としては小型に入る種、〝オウガテイル〟と呼ばれるアラガミだ。

その首根を掴む、剛腕がある。やはり逆光に照らされて真っ黒に映るシルエットは、しかしその型が人間として規格外だった。隆々と盛り上がる筋肉は相当な鍛錬を思わせ、八十kg近いアラガミを片腕で持ち上げている。
偉丈夫は逆側の手にも何かを提げているようだったが、声の主である男が目配せをすると、その両方のモノをカメラの目前に放り投げた。オウガテイルと、もう片方は――、
「……神機使い？」
煤に汚れ、服のあちこちが破けている見窄らしい格好だったが、それは成人男性だった。しかし一般人ではないと、右腕の手首に馴染みのあるシルエットが告げていた。
赤い腕輪だ。
神機こそ持っていないが、その人物が神機使いであることは誰の目にも明白だった。投げ出されたヒトもアラガミも、息も絶え絶えといった風に身じろぎしない。消耗しているというよりは、傷ついている。エリナは神機使いの腹部に赤黒い染みがあることに気付いた。オウガテイルも無数の裂傷や火傷の痕を生々しく残している。
……これを見せつける意味は何か。
「まさか」
ヒバリが声を漏らした。
同じ推理、そして恐らく同じ結論に達したらしい。

そして、

『解りやすく説明するなら、――こういうことだ』

最悪の予想図が、画面に映る。

画面端から出てきた二つの新たな人影が、その手に携えた異形の武器――その刃を、それぞれの獲物に勢いよく降り下ろす。

音はノイズに紛れて届かなかった。

ただ画面には、ヒトとアラガミが文字通り半ばから両断され、溢れ出す流血を軌跡に残して斬り飛ばされる、その様が克明に映った。

ひ、と、ウララが口元を覆い後ずさり、ヒバリがそれを支えた。

辛うじて息が残っていた生き物を無惨に殺す、そんな映像。アラガミを倒すだけであれば、ショッキングの加減としてはまだマシだったかもしれない。だが、その中には事もあろうに神機使いがいた。まるで家畜でも扱うかのように、同胞が簡単に殺された。

異形の武器の持ち主――まさしく、同じ神機使いに。

エリナは頭上にその存在を思う。厳めしい狼の記章、人類秩序の象徴。それはかつての神話において最強の軍神を殺した最凶の怪物。

荒れ狂う炎が風に煽られ、その明るみで男の肩を照らした。縫いつけられた紋章は、紛れもなく全く同じものだった。

『俺達は、アラガミを殺す神喰らい（ゴッドイーター）。そして同時に、同僚（ゴッドイーター）を殺す、殺人鬼（ゴッドイーター）だ』

平坦な、しかし聴く者に一際響かせる声が、堂々の宣言を述べる。

『これより俺たちは世界各地に点在するフェンリル支部及び各拠点を襲撃し、物資を略奪、防衛に当たっているゴッドイーターを軒並み殺して廻る。無理も無茶も承知の上、それを可能にするための力が俺達にはある』

いつも何かとざわめきの途絶えない受付ロビー一帯は、不気味なほどに静まり返っていた。恐らくこの極東支部内でこの映像を流している空間は大体が同じ有様だろう。誰もが画面に食いつくように見ていた。殺人者の首魁（しゅかい）の言葉を聴かされていた。

その違和感にいち早く気付いたのは、カウンターの中のフランだった。すぐさま自分の為すべきことを思い出し、迅速に手が動き出す。

『これから始まる殺戮は前座に過ぎない。この光景すら余興、デモンストレーションの一環だ。これからこんな地獄が世界各地に広まる。だが、俺達はお前達に何も求めていない。殺したいから殺す。殺さなければならないから殺す。シンプルに、ただそれだけだ』

妙に耳心地の良い声を聞くともなしに聞きながら、フランは迅速にコンソールを操作する。少し遅れてヒバリがカウンターに入り、同様に己の作業を始めた。

程なくして、フランがいかにも業腹といった表情を見せた。

エリナはそれらに、そして映像と音声に、ただ身を任せて見聞きしていることしか出来なかった。

『ただ、ひとつだけ。――俺達の望みは、かつての平和。この世からアラガミを滅ぼし、穏やかな日常を取り戻すために戦っている。その血を受け入れた同胞も含めて、俺達は全てを、この地獄から救う』

「ウララさん！　遠征中の第二班に連絡を！　――ウララさん!!」

先輩の一喝にようやく我に返ったウララは、それでも困惑の納めどころが解らないような表情だった。渡された無線通信用のヘッドセットを被り、半泣きになりながら周波数帯を合わせる。

『さて、全国各地の同僚諸君、特にその中でも選りすぐりの『魔人』ども。俺達を止めたければ最大の策略と火力を用意しておけ。チンタラしてても死人が増えるだけだ。無抵抗のまま殲滅されたいってんならこっちとしても気楽で有り難いもんだが、お上の連中はそれを許さんだろう。情報管理局は今頃大慌てかな？　どうあれお前達は、俺達と一戦交えることになる。まだ見ぬ友よ、互いに顔も知らない間柄だが、殺し合える時を楽しみに待っていてくれ。足りない己を自覚している奴はせいぜい腕を磨いておくことだ。それら全て悉くを俺達は凌駕し、殺し、勝利し、その度に望みへ近付くことだろう』

　映像と同じく再生される環境音の中に、僅かにプロペラの駆動音が混じった。よく注意しなければ聞き取れないほどだったが、映し出される男はその方向へ首を振り、端から出てきた仲間らしき人物に耳打ちされた。
『……始末に追われる役人が早速お出ましか。いいだろう、今日はここまでだ。これから世界は多少混乱するだろうが、心配は要らない。敵がもう一つ増えるだけだ。アラガミに対して自衛してきた今日これまでの順応性があれば、すぐに慣れる。それと、断っておくが俺達は無益な殺生は好まない。必要な飯は貰っていくし、邪魔する奴は殺すだけだが、それ以外は基本的にノータッチだ。そこを踏まえて、俺達の処遇に頭を捻るがいい』
　よっこらせ、というような調子で立ち上がる男には、何の緊張感もなかった。無人とはいえフェンリルの手先が近付いているというのに、気負うことも焦ることもなく、ひたすらに淡々と自らの演説を締め括る。
『また会おう、フェンリル諸君。俺達は〝ヴィーザル〟、死を厭わない喰人鬼（マンイーター）。黄昏時、ヴィーグリーズの野で会おう』
　古き神の名を残して、男はいつの間にか傍らに立て掛けていた神機を銃形態に切り替え、暗い銃口をレンズに向けて、躊躇いなく発砲した。
　オラクルの銃弾は当然ながら物理的な破壊力も伴う。一連の凶行を映し続けたカメ

ラは呆気なく壊されたのだろう、鼓膜を突き刺す嫌な破砕音を最後に、モニターは何も映さなくなった。

「…………」

「……ひ、ヒバリさん。フランさん……」

「落ち着いて。今必要なのは事実確認と対応要請。それが私達の仕事です。現場はずいぶん遠いみたいですが、私達が呆けているわけにはいきませんよ！」

絶句するエリナと、怯えるウララに対して、ヒバリは毅然と返した。

そこから先を、エリナは惚けたまま何となく聞き流していた。

広域帯の電波をジャックされているおかげか、いずれの支部も既に対応を始めていた。最寄りの支部からは可能な限り最速で現場に駆けつけられる無人偵察機を複数発進させたとのこと。すぐに救助部隊も編成されるだろう。極東近隣を哨戒していた第二班も、ウララが涙声で訴えた甲斐あって至急帰還の準備を始めた。

しかし、エリナは映像の中の男の言葉を反芻し続ける。

神機使いを殺す、神機使い。

本来であればアラガミに対抗するための、人類の守護者たる彼らが、同胞を殺すと宣言した。証明するかのように、確かに映像の中で神機使いを一人、殺してみせた。

平和を嘯き（うそぶき）ながら人を殺すことが、どう繋がるというのか。経験の少ないエリナは立

ちすくむしかなかった。
「ヒバリさん、北欧の支部から速報です。支部から離れたハイヴの一つが炎上していると確認。無人機の映像のみですが、確認できるだけでも死傷者多数。偵察隊の到着まで一時間はかかると」
「詳細確認し次第、各支部宛に逐次状況を連携してくれるでしょう。第一部隊と〝ブラッド〟隊の現在地は⁉」
「先ほど護送完了の通知が入ってきました。すぐさま帰投するよう申請しますか？」
「このまま戻ってきてもらった方がいいでしょう。指示があってからの出動にはなりますが、準備を整えるようにとだけ伝えてください。榊支部長は？」
「それが、先ほどからアラートを送っているのですが、一向に応答が……。今日は研究室で久々に趣味に没頭するとか仰ってましたので、気付いていないのではないかと」
「ああもう！　緊急連絡用の端末を何だと思ってるのかしら！」
「ウララさん、すみませんがひとっ走り行ってきてくれませんか？　たぶんラボにいると思いますので、ドアを叩けばさすがに気付くかと」
「は、はい」
　エリナはそこでようやく自失から立ち直った。カウンターから出ていこうとするウララを引き留め、

「わ、私が行きます！」
「エリナさん？」
「ウララさんはここでオペレーティングに集中していた方がいいと思うんです。それに私、走り回るのは慣れてますから」
「……すみません、お願いできますか？　この後のアサインはキャンセルとなりますが、恐らくすぐに出動要請（スクランブル）がかかります。いつでも出られるよう準備だけはしておいてください」
「了解です。フランさん、ランチはまた後日ということで。それでは！」
　そう言って、エリナはカウンター横の階段を突っ走り、デッキ右手側にあるエレベーターへ突っ走った。安全用の鉄格子が填められたドアの前まで十秒と経たずに駆け抜け、その扉が開くのをジリジリと待つ。
　困惑が収まったわけではない。それでも、身体を動かしてでもいなければ、平静ではいられなかった。雑用でも何でも、とにかく動いていなければ、自分の為にならなかった。
　理解できない。神機使いが神機使いを殺す、その動機が。
　歴史の座学で受けた課目の中では、人類は過去に幾度となく戦争をしていたという。国家間の境目、あるいはその境目を決めるために。思想や宗教が食い違い、我こそが

唯一絶対の存在であると証明するために。あるいは、長く続きすぎた戦争そのものを終わらせるために。
　陸海空と場所を選ばず、技術の粋を集めて暴力の塊である兵器を造り、多くの命を散らし、蝕み、その果てに一時の平和を掴んだのだと。それから百年と少しでアラガミが台頭し、あらゆる国も思想も崩壊して今に至るわけだが、逆を返せば、たったそれだけの昔まで、人類は互いに殺し合っていた。
　だが、この時代において人類同士の戦争は起こっていない。大小様々な陰謀によって歴史の裏側に消された者は多くいるだろう。しかしそれ以前に、現在はアラガミの脅威こそが最優先の懸念事項であり、対策を迫られている。オラクルを応用した技術の発展によって人類の版図は徐々に広がり続けているが、それでも犠牲者が格段に減ったかと言えば、大きく頷くことは出来ない。
　要は、生き残った人間同士で小競り合いをしている場合ではないのだ。
　だからこそ、こんなことが起こると予測した人間は、どれほどいたことだろう。
　冷や汗が伝うエリナは、その行く末を朧気にもイメージした。
　神機使い同士の戦争。人類の共食いの果てに、残るものは何なのか。

暗雲

〝ヴィーザル〟と名乗る集団の声明から二時間後。
極東支部のエグゼクティブフロア、最奥の支部長室に、エリナは立っていた。
代々受け継がれる立派な設(しつら)えの室内には、他にも数人の神機使いが集まっていた。急いで帰還した第一部隊のメンバー、藤木(ふじき)コウタ隊長と、エリナの同期であるエミール・フォン＝シュトラスブルク。防衛班と呼ばれる第二部隊隊長の大森(おおもり)タツミ、副長のブレンダン・バーデル。第三部隊所属の真壁(まかべ)ハルオミと台場(だいば)カノン。
近隣哨戒から戻った部隊、ミッション出動まで待機していた部隊の主要メンバーの顔触れに加えて、フランやウララなど数名のオペレーター。
皆が沈痛な面持ちで集まっている中——それらを見渡す位置、瀟洒(しょうしゃ)なデスクに肘を突いている男は、狐のような笑みを絶やしていなかった。
ペイラー・榊(サカキ)。フェンリル極東支部を束ねる最高司令官にして、現行の神機使いが活動するための技術基盤を築き上げた最大の功労者——ひと皮剥けばただの研究者である、現職の支部長だ。
『星を観察するもの(スターゲイザー)』などとも呼ばれる彼は、自分が招集をかけた人員が全て揃ったこと

を確認し、立ち上がる。
「皆、よく集まってくれた。まだ揃っていない者もいるが、何せ事情が事情だ。現時点でここに有る各チームの指揮官、及び遠征中の部隊には無線通信を用いて、緊急の作戦会議を執り行うよ」
　来賓を迎える応接間でもある立派な部屋の中央には、彼が急ぎ用意した大型の無線機や大画面モニターの塔が堂々と聳えていた。機材に押されるように窮屈そうな室内の隊員達を差し置いて、部屋を見渡すよう四面に張り付けられた複数枚のモニターには、極東支部が保有する最大戦力の部隊——今は各地方に分散されているベテランの顔が映し出されていた。
　その中の一つに映る、年甲斐もなく無造作に伸ばしっぱなしの黒髪を揺らす男が話し始めた。
『博士。こちら〝クレイドル〟隊長、雨宮(あまみや)リンドウだが、——見えてんのかコレ？』
「見えているし聞こえているよ、リンドウ君。〝クレイドル〟、全員そこにいるね」
『おう。とりあえず現場の報告だが、こっちは毎度お馴染みのサテライト拠点建設で遠征中。今は旧モスクワ辺りってとこだ。さっきのふざけた映像は民間のテレビにもばっちり映ってたんで覗かせてもらった。奴(やっこ)さん、全国放送をジャックしてたんだって？』

「そのようだね。発信地点は映像の中にもあった拠点ということは割り出しているが、先行部隊が駆けつけたときには誰も残っていなかった。恐らく長距離移動用のトレーラーに大きな送信機でも積んでいたのだろう。それこそ、いつかの『歌姫』のようにね」
『ンなこともあったなぁ。で、その映像の発信源？　は特定できてるのか？　あんたのことだから言われなくても追っかけてんだろ？』
「全幅の信頼を寄せてもらって非常に痛み入るが、三十二分前から彼らの痕跡を辿れなくなってしまった。そのための周辺機器や情報源が根こそぎ潰されてしまったからね。そう、それを含めて、皆にも改めて通達しよう。よく聞いてくれたまえ」
改めて、榊博士は室内にいる全員、通信の先にいる仲間へと、いつもの調子で報告した。
あの映像が流されてから、まだ三時間も経っていなかった。
「彼らの痕跡を辿れなくなったのが三十二分前。その一方、我々が最後に掴めた足取りは、彼らがフィンランドの旧国境線、最終防衛ラインに接近したという三十五分前の情報だ。耳の早い者は、既に聞き及んでいるかもしれない。だからこそ、事実を再確認するために、報告しよう」
「フェンリル北欧本部は陥落。繰り返す。フェンリル北欧本部は、謎の武装勢力によって制圧されたと、先ほど確認した」

世界の統率者。
人類最後の砦。
アラガミによって狂ってしまった世界を、綱渡りのような危うさでも何とか均衡を保っていた巨大組織〝フェンリル〟。
その総本山が、ものの数十分で、落とされた。
初耳の者は表情を強ばらせ、薄々察していた者は苦々しく顔を伏せた。
エリナは前者の内の一人だった。その上で、声を震わさないように発言する。
「事実確認は、どのように？」
「全支部から北欧本部への通信が繋がらないという情報共有、そして先行部隊の偵察の結果だ。最大規模を誇る北欧本部、その居住区以外が全て炎上していたと、報告を受けている。事実、私から北欧本部長室へのホットラインにも応答が無い。内部の状態がどうなっているかは調査中だが、本部が機能しなくなっていることは確実と見ていいだろう」
淡々とした榊の説明を、皆が静かに聴いていた。エリナはその様子に、落ち着いている、という感想を思う。
実際のところ、前代未聞の非常事態だ。フェンリルの運営母体である本部が機能停止したとなれば、今まで連綿と繋いできた悪足掻きの歴史が無に帰する。世界は今以上に

混乱し、全てが崩壊してしまうだろう――と想像するのは、素人のすることだ。
アーコロジーというものは、その土地と施設によって生産・流通・消費が賄われる自己完結型都市のことを指す。この極東支部にある『アナグラ』を含めた全世界のフェンリル支部が、それぞれ独立して運用される想定の上で建設されている。
それは、互いの存在に依存することなく、いずれかの支部が機能停止しても日常生活に影響が出ないよう力強く生存するための設計だ。
神機使いは常に最前線でアラガミと戦っている。もちろん勝利し、人類最後の砦を守り切ることが至上命題だが、必ず生還出来るとは限らない。対処の仕様がない強大なアラガミの前では、最終防衛ラインを突破されて支部ごと潰されるかもしれない。神機使いやオラクル技術が現在ほどに発展していなかった頃の名残だ。
万に一つの可能性だが、北欧本部が陥落することも無いわけではないだろう。
皆はその覚悟を決めて戦線に立っている。例えそうなったとしても、自分達に出来ることを全うするためだ。
本部陥落の一報にはエリナもそれなりにショックを受けたが、しかし後ろ向きになっていても事態は好転しないと解っている。非常事態だからこそ我々に出来る対策は何か。この場に列席している誰もが、不安を押し殺して考え続けている。
とはいえ、今回の件は少し話が違う。

「博士。ちょっといいですか」
「いいよ、コウタ君」
　冷静に発言したのは、エリナの隣に立つ上官、藤木コウタだった。
「北欧本部の防御は鉄壁だって話でしょ。生半可なアラガミの群れは簡単に蹴散らすような精鋭の神機使いばかりが守りを固めてる。おまけに正規軍もあそこの所属だ。世界で最も安全な拠点ってのが売りなのに、そんな要塞が簡単に墜ちたのは、何でですか？」
「簡単だとも。敵がアラガミではなく、自分達と同じ人間だったからさ」
　榊は事も無げに、実に科学者らしく、ただ起こった事実と補足を述べる。
「北欧本部を襲撃したのは、あの映像の中にあった〝ヴィーザル〟という集団で間違いない。映像中の拠点は本部に程近いところにあった。映像そのものは前もって録画されていた。車両での移動が可能だとすれば、多少の誤差はあれど犯行自体は不可能ではない」
「人数はどうなんですか。映像に映っていたのは五人。たったそれだけの頭数で攻略できるようなもんじゃないでしょう」
「恐らく五人、というだけの話さ。襲撃された拠点の規模は、いくら神機使いといっても容易に制圧できる広さではない。画面外にはもっと仲間がいると見ていい。神機使い

があと何人いるかは判らないがね――そう、それと、本部が落とされたのは頭数だけの問題ではない。我々フェンリルは、これまでアラガミの脅威にばかり備えてきた。一方で、それ以外のことにはからっきしなのさ」

そう言いながら、榊は改めて居住まいを正した。眼鏡の位置を指先で直し、

「そもそも神機使いというのはアラガミを討伐するために作られた部隊だ。未知の怪物を抑え、倒し、何となれば研究素材を持ち帰り、バックに控えている我々が活用するためにね。誤解を招くかもしれないが、神機使いをある種の兵器と考えるならば、それが根本的な設計思想であり、その他の運用は現場での創意工夫となる。実際、多くの犠牲を払ってきたが、それでも何とか人々の生活を最低限守ることが出来るようになった。だが、想定していない……いや、目を逸らしてきたことがある。いや、これは私も盲点だった。面白いところを突くよ、彼らは」

『感心してねーで話進めろオッサン』

第二班の通信から、若い男の声が出しゃばってきた。極東支部では馴染み深い生意気な響きに、榊は表情に苦笑の色を強めた。

「そう、我々が想定していなかったこと――それは、人と人との戦闘だ。もっと言えば、神機使い同士の戦闘、という点だね」

「……神機使い同士の、戦闘」

　反芻するようにぽつりと呟いたのは、第三部隊所属の砲兵、台場カノン。壁際に立つ彼女の横にはその上官、平時の彼からは想像できないほど険しい顔つきの真壁ハルオミが付いていた。
「神機の構造は旧時代の銃火器や刀剣の技術を応用していて、対アラガミ効果を最大限に高めた性能を持つ。それが訓練された個人に一機ずつ配備される。先にも言ったように、神機使いはフェンリルが所有する兵器であり、それぞれが一騎当千の戦力に成り得る。裏を返せば、銃刀法などというものが現行していた頃とは比べものにならないリスクを個人に持たせるというわけだ。無論、運用や保管は母体組織が徹底して担うのが大前提だけどね」
　そこまでで言葉を区切り、リンドウの映る画面から別の人物が補足した。同〝クレイドル〟所属、ソーマ・シックザールの深い声だ。
『爆弾を持ち歩いてるのと大差ないってことだ。滅多なことではドカンといかねぇが、扱い方を間違えればそいつの持ち主も、同行している仲間も危険に晒される。大量の安全装置を付けていても、どうしようもない時ってのはあるからな』
　懸念すべきは、その矛先がどこに向くか。
　設計思想の通りにアラガミへ振り下ろされるならばまだ良い。そのために開発されたのが神機であり、そのように運用されるのが神機使いだからだ。

だが、もしその刃や銃口が、人間へ向けられたなら？
「勿論、思考実験がこれまでに無いわけではなかった」
「そうなんですか？」
コウタが言うと、榊は支部長の権威を主張する立派な机に肘を突き、口元で手を組んだ。彼に興が乗り始めた合図だ。
「フェンリルから初期に支給される通常兵装を仮定して、同程度の戦績を持つ神機使いが相対した場合。または、地理的な有利不利を設定して、白兵戦用と狙撃戦用で武装した神機使いが相対した場合。組み合わせを色々と考えてみると面白いんだが、しかし全てが机上の空論で終わっていてね。理由の最たるものとしては、世界がこんな状態である以上、反乱を起こす理由は考えられないということだ」
別の画面から、年若いながらも重厚な責任感を湛えるような声が発言した。極致化技術開発局〝ブラッド〟の一隊員、ジュリウス・ヴィスコンティのものだ。
『フェンリルに真っ向から刃向かい、仮に勝利したところで、後が続かない。世界の統率者を失った世界はどうなるか？　混乱に陥った世界の中、反逆者はどのように生き延びるのか？　そもそも身体の造りからして『Ｐ―５６因子』を定期接種しなければならない神機使いが、帰る場所を失えばどうなるか？　考えるだにリスクは多い。そういうことですね』

「その通り。アラガミ化の現象は長く秘匿されてきたことだが、現在はもはや周知の事実だ。――いや、リンドウ君、気を悪くしないでくれたまえ」
『お気遣いなく。支部長殿』
『ともあれ、あらゆる観点から想定して、学会に持ち出すまでもなく現実的ではないと烙印を押されて決着したのが、神機使いの反乱、神機使い同士の戦闘という思考実験だった。だったんだが……最悪なことに、あの連中はそれを実行しやがった』
　ソーマの結論に、榊博士は苦々しく呟いた。
「こんな大胆な行動に踏み切ったのは、充分な勝算が用意できたからこそだろう。諸処の問題をクリアできる何らかの手段を見つけたんだ」
『そこにつけ込まれた結果、アラガミに対しては鉄壁の戦力を誇っていた北欧本部は泡を食った、と』
「そういうことだね。厭らしいのが、倫理感を逆手に取っているところだ。尋常な神機使いであれば、同じ人間に刃を向けることなど考えもしない。恐らく北欧本部の防衛戦力達は、まずそこに戸惑った。人命を己の手で失わせるという事に、彼らは躊躇ったんだ。性善説は疑う余地無く尊いものだが、一方で反乱者達は、全く躊躇わなかった」
　そこで、ジュリウスと同じ通信先から、彼と同世代ほどの女性の声が上がった。
『……所感ですが、慣れてますよ、あの人達。少なくとも実際に手を下した二人は』

「そう思うかね？　シエル君」
　画面の向こうではジュリウスが気を利かせて席を空け、そのスペースに銀髪の少女が映り込む。〝ブラッド〟所属、シエル・アランソンが発言する。
　エリナが知るところでは、彼女は正式な神機使いとなる以前、養護施設で対人格闘や集団戦術、暗殺などについてよく学んでいたという経緯がある。豊富な知識量から来る彼女の戦術的所見は、敵戦力を冷静に分析する一助として大いに重視されていた。
『送信されたアーカイブ映像を拝見しました。支部長が仰ったとおり、あの人達は本当に何の躊躇いもなかった。人を殺すことに慣れている。それも死なない程度に痛めつけて、虫の息のところに止めを刺す演出まで。ただ殺すだけじゃなく、旧時代の諜報機関がやってきたような、確立された技術を学んでいると見受けられます』
『技、ね。このご時世には無用の長物だったはずなんだけどな。おまけに周りにいた連中も、真ん中で喋ってた奴も、ちっとも動じてねぇときた』
『命を殺めるということに浸っている神機使い……少なくともそういうミッションを日常的に繰り返してきた人物、ということでしょうか』
『するってぇと、真っ先に容疑者として挙がるのは――』
「犯人探しは今は止めておこう、皆」
　豪奢な椅子の背もたれに身を預け、榊はゆっくりと言った。

「そう、誰もがそう思うだろうね。だが慌ててはいけない。責任の在処を探すのは余計な諍いを招きかねない。犯人が誰か判明したところで、失われた人命を蘇らせることはできないし、その瞬間に全てが一件落着となる訳ではない。心配しなくても、生き残った各支部の上層部が勝手に探ってくれるさ。私も出来ることをするし、あらかじめ釘は刺しておいた」

『手回しの良いことで。じゃあ博士、いやさ支部長殿。現場の俺達がやるべきことは？』

「無論、こんな惨劇が二度と起きないよう備えることだ。まずは民間が混乱しないように情報を制限するが、既にあんなものが全国放送された以上、どこまで落ち着かせられるかは解らない。各班は暴動などが起きないよう気を付けてくれたまえ。それから、主犯の彼らを追うことだが……とはいえ、どこから手を着けたものか」

『おいおい頼むぜオッサン、あんたがしっかりしてくれなきゃよ』

「解っているとも。しかしアラガミ対策ならともかく、神機使いの謀反となると、マニュアルも何も無いものでね」

そこでようやく、壁の花になりきっていたフランが、支給品のタブレット端末を操作しつつ発言した。

「微力ではありますが、こちらで例の映像を解析し、彼らの予測戦力を割り出しておきました。彼らがどの程度の規模で動いているのかが判らない以上、確実性には欠けます

が、何かのお役に立てればと」
「おおっ素晴らしい。我が支部のオペレーターは本当に優秀だねぇ」
柔和に笑いながら榊は端末を受け取り、同時に手元の専用ＰＣと無線リンクして各通信先の隊長格へ同様の情報を送った。
映像では炎に包まれた町が映されていた。逆光が強烈で傍目には何が映っているのか判ったものではないが、解像度や光源の調整による映像解析が行われ、その場に何人いたのか、どのような装備だったのかはすぐに判明した。
「見たところ、声明を読み上げていたのが彼らのアタマということになるだろう。そしてアラガミと人間を真っ二つにした二人の神機使い。使用しているのは大剣(バスターブレード)と短剣(ショートブレード)、他は……さすがに画質が荒くて判別出来ないか。それぞれのブランドが判(わか)れば、製造履歴を遡(さかのぼ)って人物特定に繋げられるんだが」
「解析を進めるよう指示しておきます。それから、炎の向こうで解り難いのですが、人影が……」
「二、三……見えるだけでも四人。神機を持ってるのが二人、持っていないのが二人いる。たぶん掃討のための別動隊ってやつだな」
『ムカつくぜ。計画通りに殺して場所確保したからヨユーシャクシャクってか？　でなきゃ殺しの現場を手ぶらでウロつけるわけねーもんな』

「落ち着け、シュン。……ああいや、そう考えると……」
『わざわざカメラに映り込む場所に武器も持たず……非戦闘員が現場に出る理由は、なんだ？』
「単に見せしめか、それとも映っていることに気付かないお馬鹿さんか……うぅむ、やはり逆光で人相までは見えないな。中心にいる彼の顔は読み取れそうだが」
『解析の結果待ちってことだな。じゃあ次だ。奴らの次の移動予測ルートは？』
「話が早いねぇ、リンドウ君」
「こちらです。ロードマップと照らし合わせて、複数の予測を立てました」
室内中央のモニター群に、世界地図と複数の色分けされた線が表示された。
欧州から中東近辺までを切り取った状態で、フィンランドに位置するフェンリル北欧本部の所在地を起点とした三色の線が、波を打ちながら東西に伸びている。
「優先度順に、赤、青、緑としています。最有力候補は赤の線です」
「犯行声明の中に、各支部や拠点を襲撃するという内容が含まれている以上、北欧本部にそのまま留まってはいないだろう。声明を出してから小一時間で本部を落とすフットワークの軽さだ、必要物資を奪ってすぐに出発すると見ていい。仲間が残っている可能性はあるがね」
「襲撃された拠点は、北欧本部から約六十キロ離れた場所に位置していました。移動手

段はほぼ確実に陸路。所要時間と経路を計算しましたが、十中八九、舗装された旧道を通過しています。それも相当に飛ばしているものと」
『大胆なこった。つまりは爆走してるトレーラーなりワゴンなりを片っ端から検閲していけば、そのうち当たるってわけか』
「大型車とは限らないがね。電波塔をジャックする機材だけなら軽自動車でも積み込める。後は人数次第だ」
『このご時世に民間の車両がホイホイ手に入るもんかね？』
『リース品の中古車であれば、ジャンク屋で卸されていたりするそうです。そもそも彼らは神機使いで、フェンリル所有のものを勝手に使い回している可能性も無くはないかと』
『盗品か。余罪を重ねていくねぇ』
「ともあれ、北欧支部から車で移動できる範囲のポイントは……三カ所。リンドウ君」
『ああ、把握している。まったくＧＰＳってのは便利だが、胃の痛くなる現実も教えてくれるもんなんだな』
　予測されたルートは東西へ延び、その内の東側へ抜ける候補の先には、モスクワがあった。
『可能性の話だが、近付いてきてるわけだ。俺達が居る、ここに』

同時にそこは、〝クレイドル〟が依頼を受けて護衛任務に就いていたサテライト拠点の、目と鼻の先だった。

●

「てなわけで各員、第一種戦闘配置だ。各員目ぇ光らせとけー」
「……結構な非常事態だと思うんですけど、何でリンドウさんはいつもの調子でブレないんでしょう……」
「今更気に病むなよ、アリサ。こいつは昔っからこうだ」
白の制服に狼の徽章を背負う部隊が、通信を終えてからそんな声掛けをしていた。
黒髪を無造作に伸ばし、右手を厳しい黄金の手甲に包んだ男。
透き通るような白髪に、些か風紀を問われかねない制服の着方をする若い女。
こちらは色の抜けたような白髪と、対照的に地黒の肌を持つ男。
代表的かつ中心人物である三人は、冗談めかした会話を交えつつ、周囲に固まっていた人員をそれぞれの配置へと誘導し始める。
部下二人がテキパキと仕事をし始めるのを横目に、リンドウは懐から煙草を取り出して火を着けた。部隊で使っているトレーラーに背中を預け、空を見上げて紫煙を吐く。
それを見つけた部下の男が、呆れたような目をして近付いてきた。
「あんたが前に立って働かなきゃ示しがつかねぇだろうがよ」

「俺の威厳なんかあってないようなもんだろー。気負ったところで解決策が浮かぶわけじゃなし。大仕事の前の一服だ、堪忍してくれ」
「大仕事って自覚はあるのか」
　溜息を吐く部下、ソーマ・シックザールは、リンドウと同じようにトレーラーに凭れ掛かった。
「どう思うよ？　お前の所見を聞きたい、ソーマ博士」
「主語を定めろ。あと博士はやめろ。何が聞きたいんだ」
「これは失敬。そうさな、連中……これから来るかもしれない敵を、どう見る？」
「とはいえ、俺も昔ほど前線には出ていない。情報もほとんど無い上に憶測だ。分析官でもないんだから適当だぞ」
「勘は鈍っちゃいるめぇよ」
「厄介だ。少なくとも、アラガミ以上に手こずる」
　表情の薄いソーマの言葉を、リンドウは静かに聴いた。
「録画した映像を後になって流す時間稼ぎがあったとしても、走破距離や所要時間を考えればとんでもない手際の良さだ。目標へたどり着くまでの道順や、本部そのものの内部構造にも精通している。加えて倫理面においては殺害行為への躊躇いが一切見られない。シエルも言っていたが、あのやり方は殺しに慣れている奴のすることだ。見せし

めなんていう政治的な方法も、素人が簡単に出来ることじゃない。良心の呵責が邪魔をする。恐らくは情報管理局か、それとももっと暗部で働く組織か……いずれにしろ、本部に近しい管轄の出だろう」
「神機を持っている以上、フェンリルからの流れ者ってのは間違いない。しかもそっち方面の出身だとすると、まあ相当の手練れだわな」
「ああ。アラガミだけではなく、対人戦闘にも通用する実力者達。……リンドウ、あんた、神機使いとやり合ったことはあるか？」
「ムカつく上官に殴りかかって姉上に張り飛ばされたことはあるがな。それでもせいぜい喧嘩程度のもんよ。お前は？」
「あんたほど面白いエピソードは持ってねぇ」
「あっそ。……俺もお前も、それなりに戦歴は長い方だとは思うが……ふん、超兵器を持ち出した暴徒の鎮圧に関しては未経験者しかいないってワケだ。なるほど苦戦するだろうなぁ」
　深く煙草を吸い、色濃い煙を宙に吐く。
　緩やかな風に流されて、軽口と共に消えていく。
「のんびり構えてるわけにもいかないだろう。榊のオッサンとオペレーターが出した予測では……」

「道中に障害が無ければ一両日中には来るらしい、な。ここは旧国道とは離れてるから立ち寄ってくるかは解らんが、何にせよしばらくは夜も眠れん」
「見張りはどうする」
「俺とお前、アリサとユウ。いつものメンツで交代制だ。民間人は見張り程度ならともかく、矢面には立たせられん。これもいつも通りだ」
「了解だ。外出は控えるように周知しておく」
そう言って、ソーマはリンドウの元を離れていった。
独立支援部隊〝クレイドル〟も、発足して暫らく経つが、部隊全体の動きがしっかりしてきたとリンドウは思う。
その名の通り、誰もが安心して眠れる〝揺り籠〟を世界に作るため数年前にリンドウとその部下が率先して作った部隊だ。主たる目的は、世界各地に観測されている「アラガミとの遭遇率が低い土地」を探すこと、条件が整っていれば民間人の居住施設『サテライト拠点』を建設すること。情報の少ないアラガミを追跡したり、場合によっては遊撃部隊として関わることもある。メインとなるメンバーは、かつて己の命を救われたこともあり、リンドウが最も信頼を置く極東支部の面々だ。
現在は旧ロシア、モスクワと呼ばれた地の片隅に位置する拠点でサテライト拠点の建設に着手している。とはいえ土木作業は専門の業者に任せきりで、〝クレイドル〟はそ

のボディガード役だった。拠点への供給ラインがある程度安定するまでは、こうして護衛役を買って出ている。

三方に広大な乾燥地帯、背後に細い河川を有する地形は、土壌は痩せているものの比較的アラガミとの遭遇率が低く、充分な防備を施せば人の生活も可能な場所と見られている。少し移動すれば、部下の一人であるアリサ・イリーニチナ・アミエーラが元々所属していたロシア支部までも遠くない。今回のクライアントもロシア支部だ。糧食(りょうしょく)については問題が多いが、〝眼〟を多くするという意味では有用な土地だった。

周囲を見渡す物見櫓(ものみやぐら)を設置し、周囲の監視はそれで行なう。以前よりもセンサー類を豊富に支給されているので、接近する敵に対してはより察知しやすくなっている。ロシア支部としては、このサテライト拠点をも含む巨大な監視網を作ることを目的としている事業なのだろう。それでもお構いなしに向かってくるのがアラガミであり、あの〝ヴィーザル〟という連中でもあるだろうが。

放送された声明の中で、邪魔をする民間人にも容赦はしない、と彼らは言っていた。実際、神機使いを一人殺してみせている。であれば、前線にはやはり神機使いが立つべきだろう。

神機使いとなって早十数年。今度こそ死ぬかもしれないという修羅場ばかりだったが、今回の騒ぎは、リンドウにとってまた別の緊張感を思わせていた。

ソーマとも話した通り、自分達には対人戦の経験が無い。アリサなど以ての外だろう。アラガミを討伐するのに精一杯で、同じ神機使い同士が戦うなど、これまで想像したこともなかったのだ。

性分としてデスクワークや作戦立案などは苦手なのだが、これからしばらくはその対策に頭を捻らなければならない。

そもそも、〝ヴィーザル〟とは何者なのか。

映像からも見て取れるほどの威圧と雰囲気からして、自分とほぼ同程度の戦歴を持つベテランなのだろう。そして単独ではなく、複数の仲間を従えるほどのカリスマ性もある。人道倫理に背くことを厭わないほど、共鳴してくれる仲間が。

人殺しに興味がある狂人か、それとも日頃の任務からそういうことに麻痺してしまった者か。

後者であれば、母体組織であるフェンリルに刃向かおうとする心持ちも察せないわけではない。自分も色々と無理難題を押しつけられ、理不尽な目に遭ってきた。命令を出してきた人物は今や故人扱いだが、しかし、リンドウは彼を恨むことはなかった。間違っても許せる訳ではないが、自分とて一時期は柄にもなくダブルスパイだったわけで、一概には否定しきれないというのが大人の事情というところだ。彼には彼なりの思想があり、彼なりに世界の救済方法を模索していた。

元を正せば、最も理不尽なのは、この世界だ。それに対応するためにフェンリルがあり、神機使いがいる。思惑通りに行かないのは当たり前。だが、それを通すために〝クレイドル〟は動いている。
誰もが揺りかごの中で眠れるほど、穏やかな世界をつくるために。
あの〝ヴィーザル〟も言っていた。アラガミのない世界を取り戻すために、と。
……何かが引っかかる。嫌な予感とでも言おうか。
言語化できない程度の、しかし確信に近い、最悪の予想図。
神機使いを殺すということ。アラガミのいない世界を取り戻すということ――、
「リンドウさん」
深入りしかけた思考を断ち切って、リンドウは声の方向に振り向いた。小走りで近付いてくるのは、もはや見慣れつつあるほど際どい格好の部下、アリサ・イリーニチナ・アミエーラという女性だった。
「おう、どうした」
「北北西から接近してくる反応をセンサーが検知しました。ただ、例の集団ではなさそうです」
「何だそりゃ？」
「遠目で確認した程度ですが、民間人のようでして。単独でこちらへ向かって歩いてき

ています。難民移送からはぐれたんじゃないか、とは思うんですが……」
「……んむ」
報告を受け、短くなった煙草を揉み消し、リンドウはアリサと連れだって拠点の外周へ向かった。
建設途中の作業員達を横切り、北西側の出口から外へ。手渡された双眼鏡で彼方へと目を凝らす。
確かに、人影が見える。神機使いとして補正された視力をもってしてようやく捉えられる程度ではあるが、小さく、ゆっくりとこちらへ向かってくる影がある。
「どうします？」
「そりゃ決まってるだろ。俺が行く」
双眼鏡を下ろし、それをアリサにひょいと渡す。
「バイク借りてきてくれないか、爺さんのガレージにある奴。すぐに迎えに行く」

●

この時代において、二輪駆動のバイクというものはあまりポピュラーではない。そもそも全身を外気に晒して走行する性質からして事故率が高く、さらにはアラガミの闊歩する屋外では、不測の事態に対応しきれない場合が多い。単純な移動手段として鑑みれば、燃費を差し置いても大型トレーラーやヘリに頼る方がまだマシと言える。

だが、どんな時代にも嗜好品を愛するマニアは生き残っているものだ。排気量一五〇〇ｃｃの巨大なバイクは、見た目からして随分と手入れが行き届いていた。拠点の住人であるご老体のコレクションだ。奇跡的にアラガミの難を逃れたところを発見し、以来少ない物資で細々と手入れしてきたという。
念のための護身用として神機をケースに格納し、リンドウは広い大地にバイクを走らせる。きちんとメンテナンスが施されたエンジンは頼もしく駆動し、心地よい振動が乗り手を揺らしてくれる。
拠点からの目視で確認した地点まではおよそ三キロほど。あの遭難者もこちらへ向けて歩いていることを考えれば、十分とかからず接触できるだろう。暴れ馬のようなハンドルをしっかり握り、バランスを崩さないように気を付けながら、貴重な石油燃料の排気をバラ撒いていく。
実のところ、リンドウがバイクに乗った経験というのは片手で数えられるほどしかない。遠征の度に交代制で輸送車両を運転することはあるものの、少なくともフェンリルに入隊してからはまったく接する機会がなかった。やはり効率が悪いというのが理由だろう。単身で行動するならばまだしも、燃費、貨物積載量、乗員制限、安全性を考えれば四駆が採用されるのは当たり前でもある。そうと解っていながらも、今回の拠点にいたご老体のコレクションに出会ってから密かに練習しているのは、前時代的な男のロ

マンとしか言い様がない。
風を斬って疾走する鉄の馬、洗練されたフォルムと荒々しい排気音。断言してもいいが、これに惹かれない男子はいない。あの堅物なソーマですらいつになく目を光らせていたのをこの上司は見逃さない。
せっかくなら自分も一台手に入れて極東支部に持ち帰りたい。部下達に見せびらかして悦に入りたい。愛する妻とタンデムするも良し、幼い我が子に触れさせるも良し。こんな時代には無用の長物だが、見方を変えれば貴重な郷土資料である。こんな時代だからこそ、無駄な嗜好品というものも必要だと思う。任務終わりの支給ビールだけが楽しみというのではあまりに味気ない。
「……おっと」
自分に言い訳を重ねて、後は妻をどう説得するか算段を付け始めたところで、リンドウは目標にずいぶん接近したことに気付いた。視力補正された肉眼でもそのディテールが解る距離だ。
だが、
「……なんだありゃあ」
人影、いや、まあ人影なのだろう。
見えるそれの大きさに、リンドウは思わずハンドルから手を離して目を擦りそうにな

る。慌てて自分を律し正面へ向き直るが、それだけ人影は近付き、大きくなっていく。
走り始めてから、まだ五分程度しか経っていない。
遠近法で言えばそれは正しいのだが、それにしても、あれは——デカい。
頭の先から全身をボロボロに煤けた外套(がいとう)で覆い、牛歩のごとく歩いてる姿は、ちょっとした小山が動いているようだった。背負う荷物もまた巨大で、見る者の距離感を狂わせるようなスケールだ。
人間にしてはあまりに大きい。ではアラガミか、とも思うが、地面に接している足先は長距離用のズックを履いている。数も二つ。少し信じがたいが、恐らく人間なのだろうと思うしかない。
あの有様でどれほどの距離を歩いてきたのか。リンドウはアクセルを更かし、喧しさを増して加速していく。
程なくして、彼我の距離は十メートル程度までに迫った。声を張れば何とか聞こえるぐらいの間隔だ。これほど接近しても特に敵意を表さないのであれば、捕喰本能の塊であるアラガミが襤褸切(ぼろき)れを被っているという可能性は少なくなる。緩やかに減速して停止、側部のスタンドを蹴り下げた。
改めてリンドウは、目標の体躯がおよそ二メートルに迫るほどの巨体であると再認識した。もはや巨人だ。巨人が荷を運んでいる。妙な気分になりながら、リンドウはバイ

クのクラクションを鳴らす。濁ったラッパのような音が広い野原に響き渡り、それに反応して巨体が動きを止める。
「おぉーい、そこの人――。大丈夫かぁ――」
張り上げた声に、頭と思しき部分がのっそりと持ち上がり、フードを被った虚がこちらに向いた。それと合わせて、裾から出てきた左腕がフードを取り払う。ようやく人間の顔が表に出てきた。
男のようだ。少し伸びた金髪に差し色として緋のメッシュがされている。表情には疲労が見て取れるが、窶(やつ)れてはいない。少なくとも健康的ではあり、負傷などはないとリンドウは踏んだ。
確信を得て、リンドウは歩いてそちらへ向かっていった。
「随分歩いてきたみたいだが、よくここが解ったな。怪我とかしてねえか？」
「……途中で、生きているセンサーを、みつけた。あんたは……」
掠れ声は明確な意識を思わせるもので、アラガミの擬態ではないと最後の警戒心を解く。その上で、相手の知識に構わず名乗り上げた。
「フェンリル極東支部独立支援部隊〝クレイドル〟所属、雨宮リンドウだ。兄さん、よく生きていてくれた」
その図体に見合う太い腕を気さくに叩き、まずはそんな励ましの言葉を贈った。

「ここから先、もうちっと距離はあるが、俺達のサテライト拠点がある。どこまで行くかは知らないが、ちょっと休んでいくのはどうだ？　この辺はあまりアラガミも来ないが、それでも全く遭遇しないってわけじゃない。見たところ丸腰だしな」
「ああ、有り難い……。そうさせてくれ」
安堵したような表情を見て、決まりだ、とリンドウは懐から無線機を取り出す。
スイッチを入れ、応答を待つ部下へ報告を飛ばす。
「こちらリンドウ。予想通り、要救助者一名だ。これから護送して送り届ける。水と食べ物を用意しといてくれ」
『了解。ご安全に。オーバー』
「うっし。——しかし悪いな兄さん、もう少し歩けるか？　俺はバイクだが、残念ながら……その、お前さんと2ケツ出来るほどの馬力は多分ないと思うんだ、アレ。もちろん俺だけかっ飛ばすようなことはしないからよ」
「いや、大丈夫だ。ここまで耐えたのだから、後少しぐらいは踏ん張ってみせるさ。案内してくれ」
「すまねえな」
男の一歩は大きく、重かった。疲労はあるが確かな歩調に合わせて、リンドウは自身のバイクへ近付いていく。

周辺警戒を怠らず、そのままリンドウは会話を続けた。
「しかしよく無事だったな。どこから来たんだ？　旅の人か？　ああ、喋るのが辛かったら無理しなくていい」
「いや。……東の方の難民でね。本当なら、今頃はトレーラーで護送されているはずだった。だが、突然アラガミの群れに襲われて、しかも物凄い砂嵐にまで遭って……命辛々ここまできたが、皆とははぐれてしまった。丸二日飲まず食わずだ。ここまでアラガミに遭遇しなかったのは、まさしく奇跡だ。神様のお導きに感謝しなくては」
「へぇ。となると随分遠かったんだろうな。この近辺に難民護送のキャラバンが来てるなんて報告はなかった。いや、騒ぎに紛れてうやむやになったかな」
「騒ぎ？」
「なんでもねぇ。そういうことなら、どうにか合流できるように取り次いでみよう。兄さん、名前は？」
「トール。そう呼ばれていた。この見た目だから」
「ハハ、外見を皮肉られるのはキツいよなぁ。そう呼んでいいのなら、俺もそうさせてもらうが」
「構わないよ。もう慣れたものさ」
朗らかに語るトールという男、その背に膨らんだ何かを見ながら、リンドウは問うた。

「じゃあトール。差し支えなければ、その大荷物のことは聞いてもいいか？」
「……ああ、これは家宝だ。我が家に伝わる、大事なものだ。中身は明かせないんだが、これだけは死んでも守らなければならん」
「アラガミに襲われても守るべきものか。丸腰になってまで運ぶようなもんかね」
「護身用の装備は持っているよ。気休めでしかないがね。これは私の一族がこれまで血を継いできた証だ。あんたのバイクと同じようなものさ。いずれ朽ちることとなるだろうが、それまでは次代に伝えていかなければならない。先祖の存在が、生きる活力になることもある。実際、私は幾度となく救われてきた。ここまで諦めずにいられたのも、これのおかげだ」
「そうかい。じゃあ、他人が土足で踏み込むもんじゃねえな。気が向いたら紹介してくれよ」
「ああ。ありがとう」
　意外としっかり会話ができていることに内心で驚きつつ、リンドウとトールはバイクの元までたどり着いた。初めて見た時はとてつもなく大きいと感じた車体が、トールの身長と比較すると自転車のように見えてくる。彼に合わせるとなると、アメリカ大陸横断を想定したモンスターマシーンでようやく適正と言えるだろう。ハンドルがカマキリの腕のようになっているタイプだ。

「荷物ぐらいは載せてやれるぜ、トール。それとも背負っていくかい？」
「問題ない。助けてもらっておいて厚かましいとは思うが、他人に預けられるようなものではないのでね」
「だろうなぁ。おし、んじゃもうちっと頑張るか」
両のハンドルに手をかけ、スタンドを蹴り上げる。ここから先は手押しで何とかするしかない。八十キロぐらいの重量だが、その程度は苦でもない。どちらかと言えば、拠点に着くまでの道中で他の話題を探す方が悩ましい。
車輪がゆっくり回り始めるのと同時に、リンドウは聞いた。
「いいバイクだ。せっかくアシがあるのなら、私が乗せてもらってもいいかね？」
「んー、いやいや、さすがにお前さんにはちっと小さすぎると思……」
呆れつつ半身で後ろを振り返った先、トールが外套を翻した布の音。
その懐の鈍い煌めきと、瞬きのような閃光と同時に破裂した音。
トールの口端が奇妙に吊り上がり、笑みの隙間から漏れ出る呼気の音。
聴き慣れない音の飛翔が、無防備な姿勢のリンドウに突き刺さる。

雷の声音

緩やかな風の中に、硝煙(しょうえん)の臭いが入り交じる。
煙をくゆらせる先端に、男は溜息を吹き付けた。
「……ったく、ふざけてやがる」
先程までの真面目な口調を捨て——否、切り替えて、ボリボリと頭を掻いているのは、トールと名乗った大男だ。
彼はどこか苦々しげな表情で、ぶつぶつと誰かへの恨み言を呟いた。
「三文芝居に付き合わせるつもりが、どっちも見え透いた化かし合いをするハメになるとはな。なんつー茶番だ」
その前方、正確には斜(はす)の角度。渦を巻くような深い轍(わだち)を地面に刻み、その上にリンドウが立っていた。
荒い呼吸に上下する肩、そして右腕は身体を守るように掲げられていた。刺々しく厳めしい黄金の手甲には、真新しい傷が点となって穿たれていた。
バイクを立てる余裕もなく放たれたのは、トールが隠し持っていた右腕の武器から。

　それは、彼の体躯に比べれば小さ過ぎるように見えた。
「意外と、いや見かけ通り頑丈なんだなソレ。五〇口径の早撃ちなんて曲芸じゃあ通用しねぇか」
「いやいや、お前さんも充分大概だぜ。鹿とか撃つための銃だろ」
　くすんだシルバーの塗装、大仰なリボルバー機構、野太い銃身。大柄なトールが持てばそれほど違和感はないが、日本人の体格では手に余るだろう。データベースで暇潰しがてら見たことがある程度の知識しかないが、それは旧時代の狩猟用拳銃だった。現在の神機モデルに原型として採用された、世界に数ある武器の一つだ。
　振り向きざまの不意打ち、わずか数メートルの間合いで音速を超える弾丸を撃たれた訳だが、回避できたのは神機使いであるからこその反射神経と運動性能の賜物だ。しかし予測していなければ対処し切れなかったであろう焦りが、リンドウの息を乱していた。
　それを隠すことには特に意識せず、リンドウは言葉を続けた。
「お前さんの図体なら『バガラリー』の真似事も難しくはないだろうさ。多分、俺がやったら手首が折れる。曲芸なんて卑下することはないと思うぜ」
「よせよ、恥ずかしくって穴掘っちまう。一発きりのサプライズクラッカーが見事に外されたんだぜ。これがパーティーだったら大スベりだ」

「二度は通じないと思ってくれてんのか。光栄なこったね……しかしまあ、こっちも人のことは言えんが、大昔のガラクタを後生大事に抱えてるとはな。護身用ってのはそれか？」

「まさか。こんな鉄クズがバケモンどもに通じるワケねえことぐらい知ってるだろうよ、ミスター・アマミヤ？」

トリガーガードに通した人差し指を軸に、それこそ西部劇のガンマンよろしく大型の銃をくるくると回し、また手にすっぽりと収めたところで、トールは躊躇いなくその銃を握り潰した。

片手の握力のみで、鉄の塊がまるで紙細工のようにひしゃげてしまう。そうしてトールは、何の未練もなくそれを放り捨てた。

「極東最強の神機使い、奇跡の生還者、伝説の男。オレらの間じゃあんたは超の付く有名人だ。最初に見える（まみえる）のがそんな奴とは、俺も運が良い」

「尾鰭（おひれ）が付きすぎだ。俺はただの所帯持ちだよ。そういうお前さんは、どうも俺達の同業らしいな？」

「見りゃ判んだろ。この通りさ」

言いつつ、トールは纏っていた襤褸（ぼろき）切れを一息に引き裂いた。

見かけ通りの屈強な肉体が露わになる。背には巨大な鉄製のケース。そして右腕に

は——赤い、腕輪。
紛れもなく、神機使いだ。
であれば、ここまでの道すがらを無事で済んだ理由も納得できる。
「何が家宝だ。背中のソレ、神機だろ」
「いかにも。だが嘘ばっかりじゃないぜ。実際、通り名はトールで認識されてるからな」
よっこらせ、とトールは背中のケースを地面に下ろした。上面に刻印された意匠は紅の狼。神機を持ち運ぶための簡易格納庫とでも言えるもので、遠征などによく用いられる。今し方バイクに積んでいるリンドウの神機も、全く同じ仕様のケースに仕舞われている。トールのそれはハーネスを追加して、背負えるように改造されていた。
「いい加減、自己紹介してくれてもいいんじゃないか？　トールなんてコードネームじゃなくて、お前さんの名前をよ」
「ところがそいつはうちのボスに口止めされてるんだ。調べりゃすぐに解ることなんだけどな。〝高い(tall)〟じゃなくて、発音としては〝ソー(thor)〟の方だ。そちらのお仲間にも伝えてやんな」
流暢(りゅうちょう)な英語をにこやかに発音してみせる。
こちらの小細工もバレていた。拠点を出発してから、リンドウはずっと無線のチャンネルを開いていた。彼との会話も全て、ソーマやアリサ達に筒抜けになっている。万が

一、こうなるかもしれないと見越しての策だが、まさか予測通りに事が運ぶとは思わなかった。
　今もまた、ひっきりなしに部下からの通信が入っている。
『だから言ったじゃないですか一人で行くのは危ないって！　なんですか今までの無駄な緊張感！　ドン引きです！』
『アリサ、いいから、あまり喚くと向こうの話が聞こえねえだろ。それより極東に連絡だ、あいつは間違いなく……』
「うるせえぞお前らー。つうか、援軍は？」
『ユウが真っ先に飛び出していきましたよ。到着まで十五分程度！』
「そうかい。じゃ、一旦切るぞ」
　まだ賑やかな無線機のスイッチを切り、リンドウは気を取り直してトールに向き直った。
「ほぉ、スペシャルゲストは〝極東無双〟か。こいつは嬉しくてションベン漏らしちまいそうだ」
「勘弁してくれ、誰も世話しねえぞ。それとも、〝ヴィーザル〟の看板はどいつもこいつも小便垂れって評判になるが、いいのか？」
　解り切った核心だが、だからこそリンドウははっきりと口にした。

トールも満足げに、かつ獰猛な笑みを浮かべる。よくよく見れば、その図体は例の映像にあった大男のシルエットとほぼ一致していた。

確定だ。

神機使い殺しの〝ヴィーザル〟、尖兵の〝トール〟……かつての神話における雷神を消る者が、目の前にいる。

にわかに逆立つ闘志を押さえつけながら、リンドウはあくまで任務として口を開く。

「ヨーロッパの隣とはいえ、たったこれだけの時間でよくここまで来れたもんだ。車か？」

「そこはそれ、コードネームが〝トール〟ってのの由来でな。神機に乗って来たのさ」

「……お前さんには聞きたいことが山ほどある。大人しく捕まってくれれば悪いようにはしない。固いベッドの営倉暮らしとウンザリする量の尋問があるだけだ」

「聞いてるだけで吐きそうになるね。抵抗した場合は？」

「言うこと聞くようになるまで叩きのめすさ。お前さん方に対してはまだ具体的な方針も固まっていないが、多少の暴力は始末書で解決できる」

「ふん、だったらそっちの方がまだ望みはあるな」

なあ、とトールは言った。両手の指を組み、枝を折るような音で関節を鳴らす。あからさまな威嚇だが、それは生半可な意思表示ではない。

「あんたも見たんだろ？　俺達は〝ヴィーザル〟、同胞を殺す殺人鬼。そう豪語するだけの覚悟はある。覚悟ってのは実力があってこそ伴う。――オレはテメエらを本気で殺すために、ここに来たんだぜ」

喧嘩のような小競り合いではなく、同じ人間を相手にした本気の殺し合い。

嫌な予感を確信に変えるだけの殺気が、トールの全身から噴き出している。

反射的に身構えるが、久々に胃の痛くなるような不安がリンドウを包む。

神機が遠い。薙ぎ倒されたバイクに積みっぱなしだ。約一メートルほどがこんなにも遠い。

一歩でも動けば、始まってしまう。

ちらり、とバイクの方を盗み見て、

「おいおい」

呆れたような一言だけを残し、敵が動いた。

足裏をにじらせて擦り寄る軽いステップインだが、まるで巨人の歩幅のような移動距離で一気に詰められた。

速い。

霞むほどの速度でリンドウの懐に入り込む。

大きな体躯が、こちらの目線が下がるほどの低姿勢で踏み込んでくる。

防ぐ間もなく、タックルが入った。
「ぬぐッ……!」
中型アラガミの突貫とさえ思わせる重さ。なけなしの構えはあっさりと崩され、防御の姿勢を開かれる。
だが――ぞっとした。
近い。吹っ飛ばされてなお、男の顔が鼻先まで迫る。こちらの右腕が相手の左に掴まれる。
ただの当て身だ。
本命は、次の踏み込み、その奥――。
「――余所見してんなよ極東最強ッ!!」
裂帛の喝が耳朶を叩く間に、莫大の衝撃がリンドウの腹部にぶち込まれる。

●

神機使いとしての身体改造は、運動能力の向上のみならず、単純な耐久性にも及んでいる。人知を越えた怪物と戦う以上、そして高速での立ち回りを要求されることの多い現場では、元来の人間の身体では耐えきれない。まして神機の盾で防げる攻撃ばかりではない。時にはモロに被弾するというのも、ままあることだ。
だからこそ、神機使いへの身体改造――より具体的に〝偏食因子投与による内側から

の変化〞は、更なる効果をもたらすように研究されてきた。おかげで昔に比べれば随分とやりやすくなったと思う。新種を除いた従来のアラガミ相手ならば、新人でもそう簡単に死にはしない。先人の犠牲を積み上げた末に得られた恩恵だ。

だが、同じ条件で改造された神機使い同士であれば、マージンは全て取り払われると考えていいだろう。

身体能力も耐久性も、基本となるステータスは全て対等。ならばそこに差を付けるには、個々人が修めた鍛錬や経験がモノを言う。

それは単純な体術などに限らず、神機を用いない肉弾戦においても言えることだ。

防御を崩してからのボディブロー――ただそれだけの型だが、まるで岩塊のような拳は、リンドウの鳩尾から肋骨にまで痛撃を広げた。

みし、と嫌な音がする。内臓がまとめて押し潰される。インパクトの瞬間に手を離されたおかげで、リンドウの身体は数メートルも吹っ飛ばされた。

着地してなお勢いは収まらずに転がり続け、荒れた地表に剥き出しの皮膚を削られていく。

腹を潰された圧迫感に嗚咽が止まらず、しかし痛覚の余りに意識が薄らいでいく。殺意の塊が悠然と近付いてくるにもかかわらず、指一本動かすことすら億劫になる。軋む全身を守ろうとする本能が脱力させ、自身に諦めを促してくる。

——それら全てを、叩き出す。

「……ほお」

立つ。立ち上がる。久々のとんでもない痛覚は無視できないが、それでも寝転がっているだけでは死が待つだけだ。

そうだ、この程度は現場で何度となく食らっている。無傷での帰還など珍しいぐらいだ。遙か昔の新人時代からベテランと呼ばれるようになった今まで、アラガミの突貫などうんざりするほど経験している。

「結構本気のつもりだったんだがな。受け身もガードも崩した。アバラの何本かはイってる。息を吸うのも辛いはずだぜ」

「……頑丈なのが、取り柄なんでな。しかしまあ……」

震える膝を必死に抑えて、見栄を張るように、立ち続ける。実際に呼吸する度に悲鳴を上げる肋骨を無視して、リンドウは赤の混じった胆を吐き捨てた。

「神機使いの訓練課程には無いな、その動き。まるっきり対人戦闘を想定した型だ。どこで習った？」

「無駄口叩く余裕まであるか。こりゃオレも修行不足だな。なに、アメリカじゃあ昔からカラテやジュードーは人気のスポーツさ。一番好きなのはラグビーボールだ」

「太極拳も修めたクチか？」

「噛じってはみたが、どうもソリが合わなかった。そもそも神機使いになってからは役立つ機会もなかったからな」
まったく、とトールは大げさに嘆息してみせた。
「どいつもこいつも弱っちい。脆すぎる。いい加減アラガミどもだって狩り尽くして飽き飽きしてきたってのに、それより弱い人間なんか歯ごたえもありゃしねえ。同じ神機使いならと期待してみたが、噂の極東最強だってこの有様だ。たかが当て身で怯まれてちゃガン萎えってもんだ」
「こいつは手厳しい……。そうか、お前が〝ヴィーザル〟にいる理由は……」
「アラガミを殺すのは飽きた。だから人間を殺す。論理的だろ？　ボスの意向で一般人は殺れねえが、同じ神機使いなら許可してくれるとさ。まったく〝軍神〟サマサマだぜ」
総毛立つとはこのことだ。嫌な予感が的中した。
いつか、こういう手合いが出てくるのではないかと危惧していた。アラガミ相手にしても一切油断はできないというのに、神機使いとしての自分に酔った大馬鹿者がどこかに現れるのではないかと。人類の天敵がばっこする世の中も長く続けば日常と感じ、退屈する者が出てくるのではないかと。
神機とは、兵器の一つだ。フェンリルが管理するものではあるものの、戦場において

は一個人に委ねられる。例え名目としてはアラガミ討伐が第一だとしても、最終的にそれをどう扱うかは使用者の一存に依る。
身の丈に合わない力を得て、なおも自覚の足りない人間は、力に酔う。アラガミという天敵がいる状況が目の前にあるからこそ、単純な盲点に誰も気付かないようになっていた。
〝ヴィーザル〟の宣言の一節。「殺したいから殺す」。
その言葉に何の裏も無いというのなら。
「本気で殺すつもりか。そこらの神機使い、全員を？」
「そうだ」
トールは当然のように答えた。
「まだ甘く見てるようだがな、そこらのじゃねえ。世界中だ。虫ケラみてえに増えた神機使いを徹頭徹尾殺し尽くす。それがあいつの方針だ。最初は馬鹿な話だと思ったが、うちのボスがやる気になったんじゃ仕方がねえ」
「何のために。てめえの喧嘩がしたいだけなら身内で食い合ってればいいだろ」
「身内が相手してくれねえから外に出たんだよ。それに、大局的な目線でモノを見るのはオレの仕事じゃねえ。オレはただの駒。あまねく戦場をひっかき回す捨て駒さ。オレは指示された場所で好き放題暴れていればいい。軍規だの何だの下らねえもんから

やっと解放されたんだ」
　だったら、とリンドウは言った。
「お前さんは、ここで俺は殺せない。そうだな？」
「…………」
「組織の法やルールが融通利かねえ頭でっかちなのはまあ俺も解る。だが、代わりにお前さんはボスに義理立てている。飼い慣らされてるのに変わりはない。リードの先を誰が握っているかってだけだ。大局的にものを見るボスに従うのが駒の役割だろ？」
「ほぉ、断言するか。言っとくがオレは単独行動の多い問題児って評判だ。何故そんな期待が出来る？」
「お前さんの力量なら難しくはないだろうに、わざわざ難民のフリなんかしなくてもよかっただろう。大根役者っぷりに正直寒気がして仕方なかったぜ」
「そりゃお互い様だと思うがな。それで？」
「暴れ回るだけが能の駒だと解ってるなら、ただ暴れさせるだけじゃ面白くない。お楽しみは後に、ってことだろ。その方がお前さんみたいな奴もノリやすい」
「はは」
　トールの笑みが深くなる。
「さすがは現役の隊長殿。てっきり同類かと思ったが、しっかり考える頭もあるわけだ。

これは後々面倒臭い手合いになるなぁ」
「一緒にすんじゃやねぇよ戦闘狂。こっちはもうちっと理性的だ」
「いいや、オレとテメェは同類さ。取り繕うこたねぇよ」
厭らしい笑みが、リンドウの眼をまっすぐに射止めた。
確信に満ちたという声が、耳朶を叩く。
「いくら喰っても満たされない欲が根深いところに植え付けられてる。否定するこたねぇ。それが神機使いの本性なのさ、ミスター・アマミヤ」
――ここだ。
不愉快な声とは別の音を察知し、瞬間、リンドウは左手を閃かせた。
早業でピンを抜かれたフラッシュバン。アラガミ用ではなく、暴徒鎮圧のための対人護身装備が、無防備な両者の間に放り込まれた。
昼にあって尚も眩むような閃光、耳をつんざく高周波がぶち撒けられ、視覚と聴覚が塗り潰される。
それが反撃の合図となった。
さしもの戦闘狂も目を守るように片手で覆い、顔を苦悶の表情にしかめる。真正面のリンドウもただでは済まないが、構わない。その一瞬の隙で充分だった。
リンドウの真後ろ、背中側から誰かが躍り出る。

約十五キロメートルの直線距離を全力疾走していながら、こちらに最接近するまでの数十メートルは幅跳びのような跳躍で距離を稼ぎ、なおかつ足音は殺していた。そんな芸当が出来る者はそう多くはない。

狼の記章を刻まれた白い隊服、赤い腕輪、静謐な青に縁取られる長大な神機を、リンドウは閃光に焼かれる視界の中で辛うじて見て取った。

神薙ユウ。

その頼もしい背中が、そこにある。

落下地点は怯んでいる敵の真上、迷いなく刃の切っ先は獲物へ飛びかかり、

「ンの野郎……！」

しかしトールも反応してみせる。

気配を感じ取る、などと曖昧な勘と経験は、五感が正常に働いて初めて機能するものだ。にもかかわらず、目と耳を潰されてもトールは動いた。

振り下ろされる刃はトールの右肩を削ぎ落とす軌道にあり、その上で彼は左へよろめくように避けた。青い刀身は獲物を捉えられず、力の余波は乾いた地面に深々と裂傷を穿つ。

だが、ユウは驚いていない様子だった。避けられることは見越しているとでも言うように、剣を振り抜くと同時に右転、真横で姿勢を崩す敵に二撃目を叩き込む。

その時点で、トールは目を確と開いていた。
標的を両断せんと迫る剣は速く、長剣であるゆえに多少距離を取る程度では間に合わない。だからこそ、剣が届かない位置に逃げ込む判断をした。
脱力。膝を撓め、背中を反らし、反らしていきー―倒れる。
剛と唸る剣が鼻先スレスレを掠めた頃、トールは背中から完全に寝転んでいた。
それでは終わらない。足を丸め、反動をつけて起き上がる。獰猛な笑みと共に、凶器と化したヘッドバッドが迫る。
ユウも空振りと確信した瞬間に更なる回転を加える。勢いを止めず、肉薄の間合いで躊躇いなく元の位置へ直り、迫る横っ面に神機の石突きを叩き込む。
ドシッ!!　と鉄が肉にめり込む衝突。
「……ユウ……！」
名を呼ばれた青年は、リンドウに会釈を送る余裕も無いようだった。
嵐のような一合を経て、ようやく両者は止まった。
石突きの先端を、トールはそのまま顔面に貰うことはせず、すかさず掲げた左の掌で受け止めていた。鉄塊がめり込んだ分厚い左手は、それでも多少は変形していた。
「………………」
拮抗した姿勢のまま、睨み合いが続く。

極東支部に入隊して僅かな間で目覚ましい成長を遂げ、今もなお留まることのない屈指の神機使い。その功績は極東支部を幾度となく救うほどで、〝クレイドル〟発足からこれまでにも数々の功績を挙げている。

拠点からここまで、乗り物も使わずにただ突っ走り、絶好のタイミングで助太刀に来てくれた。背後に迫る気配を感じたからこそ、リンドウも仕掛ける機会を計ることが出来た。

しかし、この均衡はマズい、と思う。

トールの左手は使い物にならなくなっただろうが、他の腕と足は健在だ。鍛えられた筋肉に基づく速度があれば、もう一撃を入れることも可能だろう。

一方でユウはと言えば、敵の左を潰すのと引き替えに、神機を捕まれている。掌に密集した骨は砕けているはずだが、もはや火事場の何とやらなのだろう。得物を確保されている以上は身動きも取れず、無防備ですらぁある。

神機を手放せば対応も出来るかもしれない。だが、ほとんど密着している距離でアドリブが効くかどうか。

奇襲のキレは見事なものだったが、彼もまたアラガミ以外に神機を向けたことのない人間だ。今までの動きも、いつでも止められるように手を抜いていた。出来ればこの時点で相手を無力化しておきたかったところだ。

膠着したまま、仕掛けるタイミングを見計らっている。
どちらが動くか。
冷や汗が伝う中、トールが口を開いた。
「……いいだろう」
そのまま動き始める。ゆっくり、ゆっくりと立ち上がり、左手の固定は全く緩めないまま、動くに動けないユウを巨漢が見下ろす。
表情に殺気は無く、むしろ清々しいような風情の、満足げな顔だった。
「〃極東最強〃、若けぇのに大したもんだ。よほど覚悟は出来ているな。うちのボスと仕合わせてみてえもんだが、ま、嫌でもいずれカチ合うだろう。その時を楽しみにするかね」
言いながら、石付きを鷲掴む手に力を込め、神機の持ち主ごと悠々と持ち上げてみせる。甲の骨がひしゃげているにも関わらず、総重量百キロ近くのそれを荷物のように掲げ、ひょいと振り払うように放り投げる。
姿勢は危うかったが、ユウはどうにか着地した。ただそれだけで、数メートルの距離を簡単に空けられる。
さて、とトールは言った。
「見たいものは見させてもらった。帰るわ」

遊びに来た友達が席を立つかのように、気軽に言ってみせた。
「……逃げる気か。いや、逃げられると思ってるのか」
「オレ達は最初から逃げも隠れもしてねえよ。ここらが潮時ってやつだ。ここでテメエらをブチ殺すのは簡単だが、テメエの言った通りさ。お楽しみは後に取っておけ、ってな。……それとも、片手潰した程度で勝てるとでも思ってんのか？」
誰も答えなかった。
それが本音だと、トールも察したらしい。
「なに、残念がることはねえ。次は本気の殺し合いだ。しっかり戦場(ロケーション)から組み立てて、みんなまとめて楽しもうや。ボスもそれを望んでる」
「何を始める気だ。戦争でもやろうってのか？」
「おっ、勘が鋭いな」
「……おい？」
に、と巨漢は犬歯を剥き出しに、実に楽しそうに笑った。
「ヒントはサービスしまくってるぜ。見え透いた作戦だが、テメエらはどうする？　人類の守護者なんて下らない看板掲げてるテメエらは、人殺しにどう対応する？　同じ神機使いを殺せるか？　それとも、うちのボスの台本通りに事を進めるか？」
言いながら、トールは自分の神機ケースに歩み寄っていった。適当に放っておかれて

いたそれを立て直し、ケースのロックを外す。
　口を開けたケースの中身が空気に触れ、この間隔でも耳をまさぐられるような嫌な音が溢れ出した。
　ぐじゃり、ぐじゃりと、虫が這うような音を立てて、見慣れた柄が突き出された。トールはそれを掴み、引き出していく。長く、長く引いていき、ようやくそれの先端が露わになった。
　種別はポール型神機だが、一般に普及しているモデルよりも一回り長大だった。巨漢のトールが携行して初めて丁度良いサイズ感になる。先端部に集中する神機パーツはそれぞれハンマー、ブラスト、バックラー。黄金とまでは言わないまでも、目に明るい彩色が特徴的なパーツで揃えられていた。
「……雷鎚ミョルニル、ってわけか。そんなに神話好きか？」
「どっちかっていうとボスの趣味だな。元々はバスター派なんだが、古巣でテスター依頼されてからはずっとこいつだ。昔のアレよりはマシな使い勝手になったろ」
　現在ではポール型として区別されるようになったが、槍やハンマーをモチーフとした刀身パーツは昔から存在していた。剣として扱うことを想定していた神機の短い柄に無理矢理重いハンマーなどをくっつけて運用していたものだ。ユウの後輩にもベルリン支部へ異動したハンマー使いがいるが、彼女はいい加減に換装したのだろうか。

ともあれ、リンドウはその神機を見て納得する。ハンマータイプの最大の特徴は、ジェット機のエンジンじみたブースト機構と、それを用いた高速戦闘だ。神機に乗ってきた、というのはあながち冗談でもないのだろう。
そして、それを取り出した意味は。
「……ユウ」
掠れる声で後輩へ呼びかける。青年もまた、小さく頷いて応えた。
逃げる気だ。ならば、とユウは携えた神機を構える。いつでも飛び出せるよう、踏み込みの足を整える。
だが、意に介していないかのように、トールは喋り続ける。
「止める、などと簡単に言ってくれるなよ？　同類諸君」
柱のような神機を手に馴染ませるために振り回す。その度に空気が薙ぎ払われ、結構な強風としてこちらに流れてくる。
「まずは己の在り様をよく反省することだ。そうして悔い、改める頃には、うちのボスの心情も多少は解ってくる。神機使いってのがどういうものなのか、テメエが一体どういうものを受け入れたのか。異常なのはどっちなのかってのをな。その上で追ってくるなら好きにしな。オレ達は逃げも隠れもしない。ただし――」
言いつつ、トールは腰に提げたバックパックから、手に収まる大きさのカプセルケー

スを取り出した。指先で口を捻り、シャカシャカと良い音を立てて中身を降ると、小粒の丸薬が転がり出てくる。
赤錆のような色をしたそれを口に放り込み、奥歯で一息に噛み砕いた。
――――変わる。
「……おい、どういうことだ」
肌に感じる圧が変わる。乾いた空気に混じる質が変わる。それはよく見知ったもののようでいて、しかし記憶しているそれによりも遙かに凶悪で禍々しかった。
神機使いとしての機能解放、限界突破の現象。
《バースト》。
本来であれば生体活動中のアラガミを捕喰し、神機を通して摂取することでしか発揮されない励起状態。
それを、薬一粒で解放した。
唖然とする二人を目に、トールは溜飲が下がったような、ひどく厭らしい笑みを浮かべた。
「戦場に身を投じる以上、誰もが殺し殺される因果にあり、いずれは死ぬ。だから、敵を恐れろ。オレ達を恐れろ。テメエらが感じたそれをしっかり持ち帰れ。どんな隠し玉を持ってるのか解らない連中を相手にしてるんだ、ってな」

持ち主に合わせて、神機の様子も変わる。ハンマー部分の表面に、目に見えるほどのスパークが迸る。気付けば周囲の空気もまたピリピリと刺すように変質していた。まるで帯電する雲の中にいるようだ。

磁気を帯びて、地面の塵や砂埃が舞い上がる。稲妻の音が、誰の耳にも大きく響く。

「さあ、さあ、さあ！　〝雷神トール〟のお出ましだ！　これが『黄昏』の先触れパート2だぜ！　遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にも見よってなァ！」

天高く、まっすぐに、雷鎚が片腕で掲げられる。

晴天に幾条もの霹靂が奔り、それら全てが避雷針へ収斂する。

閃光は目映く、そして、

「燃えよ、敗れよ、頌歌(しょうか)を唄え！　――《ヴィングトール》!!!」

雷霆(らいてい)が、振り下ろされた。

ユウが咄嗟に盾を展開し、リンドウの目前へ立つが、無駄だった。

神機のみの出力では有り得ない莫大量の放電は全方位へ及び、効果範囲に存在する全ての物体へ、盾の後ろに回り込んでまで、その先端を触れさせた。

全身の神経系に無数の針を突き刺されているようだった。

眼球が破裂したように、視界が白く塗り潰された。

高圧電流は単純な痛覚のみならず、外皮と内臓にも差別無く爪を立てる。頭から足の

先端まで、内臓の奥まで、あらゆる部位に致死量の電流が叩き込まれる。電気信号を用いる思考はシナプスの許容量を遥かに超える電圧に悲鳴を上げ、あっさりと機能を停止した。
逃げる間もなく、防ぎようがなく、今度こそ立てなかった。
そこから先に何が起こったかを、とうとうリンドウは覚えていなかった。

ENGAGE ON DESERT

遮音性の高いヘッドセット越しにも、ヘリの激しいローター音が鼓膜に伝わってくる。鉄の床に着地していながらも全身を浮遊感が包んでいる。

高度二百メートルの上空を、エリナ・デア＝フォーゲルヴァイデは輸送ヘリで運ばれていた。

飛行型に進化したアラガミの探知範囲に引っかからないよう細心の注意を払いつつ、エリナはゆっくりと流れていくように見える遠景を眺めていた。最寄りの支部からここへ至るまで、眼下には砂漠の海が広がっている。天気は眩しいほどの晴天で、湿気がない代わりに照りつける太陽が気温を高めている。カーゴドアを開け放ち、そこそこの強風が吹き込んでいるにも関わらず、背中にじっとりと汗が浮かんでくる。

『まもなく降下地点（ランディングポイント）です』

ヘリパイロットの声がヘッドセットから響いてくる。エリナは外へ向けた視線を戻し、目の前で同じように着座している相手を見る。

今回の作戦の相棒と頷き合い、傍らに備えていた神機ケースを二人同時に手に取っ

た。

中東、旧アラビア地区の一角。
全てが砂に呑み込まれた国が、今回の遠征地だった。

●

北欧本部陥落から五日が経ち、残されたフェンリル各支部は早々に対処へ追われることとなった。
榊支部長の指示通りに、一般人には〝ヴィーザル〟に関する情報開示はほとんど行われなかったものの、既に公共放送をジャックされた以上、例の映像は市井（しせい）へ無差別に流れている。当然ながら、フェンリルの対応に不満を表明する者は多く現れた。
何よりも、アラガミと併せて人間を殺した猟奇的な映像に不安を掻き立てられた者の方が多いのだろう。結成されたデモ隊に対してフェンリルは普段以上に口を閉ざし、ただひたすら「詳細確認中である」とお役所らしい返答をするばかりだった。この有様では、暴動が起こるのも時間の問題だろう。
また、北欧本部が敵の手に落ちたことについて、こちらは一切報道されていない。少なくとも極東支部近辺の火種は、上述のデモ隊のみとなっている。
混乱している外部とは裏腹に、神機使い達は次々と発注されるミッションをひたすらこなしていく生活を続けていた。ただ、その内容にも多少のアレンジが加えられていっ

た。
例えば、極東における守りの要である第二、第三部隊には、通常の哨戒や討伐と同時に集中的な侵攻対策をとるよう指示がされている。敵が神出鬼没であることから、哨戒エリアとルートの見直し、近隣に潜伏可能なスポットが有るか無いかを徹底的に捜査するなど、平時に増して防衛に徹する態勢となった。
他の支部も同様だ。遠征任務は控えるように調整され、自らの所属支部に駐屯するよう許られている。
一方で、抜けた遠征任務の穴については各支部の主力部隊が埋めるよう指示された。とはいえ限られた人数をさらに裂くことを考慮し、極東支部第一部隊は帰投した〝ブラッド〟と合流し人員を再編成。小規模な遊撃隊として分かれ、各遠征地へ出向することとなった。
本来であれば主力の部隊こそ支部に屯するべきところだが、あの声明以降〝ヴィーザル〟と思しき犯行が連日増加傾向にあり、対応するための人手が足りないという事態が浮かび上がった。主に神機使いを害すると公言して憚らないテロリストに備えるとなれば、嫌でも危機感を覚えるというものだ。
世界に現存する神機使いの中でも特に有能な者が集っていたのが北欧本部だった。その総本山があっさりと落とされた事実に、誰もが恐れている。自分を殺す死神が今に

も襲ってくるのではないかと。
さらにその恐怖を後押しする報が、五日前に全支部へ伝えられた。
極東支部独立支援部隊〝クレイドル〟雨宮リンドウ隊長、及び神薙ユウ副隊長が〝ヴィーザル〟の尖兵と接触し交戦。
両名とも意識不明の重体。
現在はロシア支部にて集中治療を施されている。

●

砂の丘に、二人の少女が立つ。
遠ざかるヘリが巻き起こす風を受けながら、長槍型の神機を携えるのがエリナ。もう一人は、涼しげな淡水色の短剣型神機を展開する、銀髪の女性だった。
シエル・アランソン。〝ブラッド〟における頭脳と眼、戦略に長けた女性だ。
どちらとも神機の調子を確かめ、問題無しと判断。通信機のスイッチを入れ、シエルが短い報告を入れる。
「FE（極東）―04よりCP（本部）へ。降下地点へ到着、予定時刻と誤差無し。周囲に敵影無し。これより任務を開始します」
『CP了解。モニタリング感度良好。承前の通り、まずは旧市街地へ向かってください。御安全に願います。オーバー』

アラビア支部のオペレーターからの返答を最後に、通信が一旦切れる。エリナはシエルと視線を合わせ、ぺこりと頭を下げた。
「改めてよろしくお願いします、シエルさん。貴方とご一緒できるなら、とても心強いです」
「こちらこそ。ここから先は一蓮托生です。頑張りましょう」
「はい！」
気合いの入ったエリナの声に、シエルは柔和な微笑を浮かべた。
両隊の再編成にあたって重視されたのは、かかる危難への対応能力のバランスだった。激戦区で日々腕を磨く第一部隊の経験、特異な状況にあっても発揮される『血の力』を備えた〝ブラッド〟の突破力、この二つを程良い塩梅にする必要があった。
極東支部の判断としては、太平洋側から海路で侵攻される可能性については見切り、大陸側からの侵攻を危惧した。そのため、ユーラシア大陸の南北を両断するような偵察網を敷くこととし、各支部との連携のもと、非常事態時には近隣の地区に駐屯しているメンバーと部隊が急行できるよう配備された。
ロシアから身動きできない戦友への見舞いもかねて、北方へはコウタ隊長とジュリウス・ヴィスコンティが出向。エリナの同期であるエミールは、ギルバート・マクレーンと香月ナナと共にモンゴル方面。〝ブラッド〟隊長とロミオ・レオーニ、リヴィ・コレッ

トはインド洋方面。そしてこの中東方面には、エリナとシエルの両名が担当することとなった。
少し前まで〝ブラッド〟の任務にヘルプとして駆り出されていたこともあるエリナからすれば、シエル・アランソンという神機使いの能力は非常に頼もしくあった。
幼少期から叩き込まれたという戦術理論に基づく鋭い状況判断は勿論のこと、特筆すべきは彼女の『血の力』だ。
能力は『知覚』と呼ばれる。いわば空間把握能力の拡張で、レーダーなどを用いずとも彼女自身が広範囲のアラガミを探知することが出来るというものだ。専用機材に接続すれば、作戦地域一帯に蔓延(はびこ)るアラガミを残らずモニタリングすることも可能となる。今回支援要請を寄越してきたアラビア支部とのリンクも済ませており、リアルタイムで眼を光らせている。
彼女がいれば、大抵の敵影接近には対処できる。不測の事態が起こり難く、ある程度の余裕を持つことが出来るのは大きなアドバンテージだ。何より彼女の『血の力』はアラガミだけでなく神機使いにも及ぶため、〝ヴィーザル〟の所在にも鋭く感知してくれることだろう。遊撃としてこれ以上に適した人材は望むべくもない。
無尽(むじん)に広がる砂漠へ向き直る。雲一つない空に剥き出しの太陽が地表を灼(や)き、上からも下からも熱波を浴びながら、携帯端末で目的地までの経路を表示する。

「北北東四十度、哨戒スポットまで徒歩約二十分ほどの距離ですね。行きましょうか」
「……車で行くのはダメだったんでしょうか。いくらなんでも熱中症で倒れそうなんですけど……」
「この辺りは砂の積載が深く、タイヤが埋まって身動きが取れなくなるそうです。そうでなくても走行音で敵に気付かれやすいというのがありますね。対空兵器を所持している可能性も無視出来ず、射程のギリギリ外まで、というのがアラビア支部の判断です」
「了解です……」
「目的地は最近まで前線基地でもあったので、補給設備は多少の用意があるとのことでしたから、そこまで頑張りましょう」
道中に日陰やオアシスは望めそうにない。ただでさえここへ着くまでに空路と陸路をそれぞれ一両日かけて移動しており、どれも快適な旅とは言い難かった。既に疲れを感じながら、エリナは一歩を踏み出した。
中東、旧サウジアラビア方面。
目的地はかつてイラクと呼ばれた首都近辺となっていた。被害報告の多いヨーロッパに隣接する地域であり、〝ヴィーザル〟の行動予測範囲にも入っている。依頼主であるアラビア支部は襲撃候補の上位に挙がっており、エリナとシエルがここに飛ばされたのもそれが理由だった。

先日の〝クレイドル〟が襲撃されたのは旧ロシアのモスクワ支部に程近い位置だった。にもかかわらず、〝ヴィーザル〟はロシアへ立ち入ることはなく斥候を送るに留めている。その斥候も、役目を終えた後は即座に引き返したようだ。

北欧本部を落とした本隊はその後、ロシアを回り込むような経路――地中海と黒海の間を南下するようなルートで、これまでにルーマニア、トルコに点在するハイヴが被害を受けていた。

例の宣言に倣って警備に当たっていた神機使いは軒並み殺害。戦闘に巻き込まれた民間人にも重軽傷者が多発している。

欧州の支部は後手に回らざるを得ず、被害状況の調査と収束に追われている。

次に現れるとすれば、カスピ海にぶつかってから再び北上するか、もしくは大陸の東へ向かうか。いずれにしろ、中継地点としてどこかのハイヴ、もしくは支部が襲われる可能性が高い。

エリナ達が向かう旧イラク首都は、数ヶ月前にアラガミの大群を討伐するための前線基地として整備されていた。物資の引き上げが充分にされておらず、人手が不足しているることもあって無人の観測拠点として現在も放置されている。彼らのとんでもないフットワークの軽さを考えれば、この近辺に出没する可能性は高いと言えた。

額に滲む汗を拭いながら、エリナは呟いた。

「それにしても、本当に砂ばっかり……。ところどころに建物の名残らしいものはありますけど、アラビア支部の周りも砂漠だったし、とても人が住める環境じゃないですね」
「元々気候が穏やかではない地理ではありますが、やはりアラガミ……というより、オラクルの影響が大きいのでしょう。そうでなくとも、中東方面と言えば二十一世紀中も戦乱が絶えなかった歴史がありますから」
シエルの説明に、エリナは道中の暇潰しがてら読み漁った文献を思い出した。
湾岸戦争やイラク戦争。宗教観やプロパガンダのために度重なるテロリズム、鎮圧と銘打った政府主導の空爆作戦。こんなものが近代以降、ずっと続いていたという。
一日に何度も爆発が起こり、日毎（ひごと）に何百もの死傷者が量産された。現地民間人の暮らしは貧困から抜け出せず、生活の向上を目指すなら銃を取るしかなかった。その他に平和を求める手段がなかったのだ。結果として武装解除も儘（まま）ならない悪循環が繰り返された。
その歴史に止めを刺したのが、オラクル細胞とアラガミだ。
戦争によって荒れた土地は、天候の変質によって大量の砂が呑み込むことで更地と化した。何もかもを砂の下に埋め、生き残った僅かな人間も、アラガミに喰い散らかされた。雲が発生せず、一帯の降水率は年間を通して二桁を切っている。草木どころか地下水すらも枯れ果て、遍（あまね）く生物の定住を拒む不毛の地帯となった。

「ＢＣ兵器の類は使用されていなかったという話ではありますが、アラガミの生態に変異を及ぼす物質は多かったでしょうね。クアドリガ神種が初めて観測されたのが地中海沿岸という説もありますし、無関係ではないでしょう」

「連中、脚はキャタピラだし、ミサイル撃ってくるわけですからね。戦争に使われた残留物を取り込んだとか。……支部の意向を批判するつもりはないんですが、そんな不毛の地帯にわざわざテロリストがやってくるんでしょうか。前線基地の物資を強奪するかもしれないっていう危機感は解るんですけど、そのために数百キロも移動する手間をかけるのか……」

エリナの疑問に、この猛暑にも鉄面皮の如く汗一つ掻いていないシエルが答えた。

「確かに、物資補給のみを考えれば欧州に留まる方が遙かに上策でしょう。しかしあの基地の魅力は、今も無人で運用されている点です。警報装置などを黙らせてしまえば、脛に傷を持つ人間にとっては隠れ家にピッタリなんですよ」

「ああ、そこに先回りして潰してしまおう、ってことですか」

「そういうことです。或いは既に先行されているかもしれませんが、その様子を伺うのが今回の任務というわけです。体のいい露払いですけどね」

「……戦闘の必要はない、ですよね？」

「ええ。あくまで偵察、そして情報を持ち帰ることが目的ですから。……事と次第に

よっては、その限りではありませんが」

皮肉なもので、人類は壊滅が目に見えた時点で戦争を止めた。否、それは結局、牙を剥くべき敵がアラガミに変わっただけなのだ。人は今も戦い続け、命を散らす者は後を絶たない。

そうだとしても、人間同士が殺し合う必要は無くなった。

だが、〝ヴィーザル〟はその世相に真っ向から刃向かっている。既に複数のハイヴが襲撃され、少なからぬ神機使いが殺された。何よりエリナも無関係ではない、雨宮リンドウと神薙ユウの戦闘不能は手痛い損失だった。

欧州各地の支部やハイヴは厳戒態勢を敷いているが、それでも網目をすり抜けて、彼らはどこからともなく現れる。そこに神機使いがいるのなら、容赦なく殺しにかかってくる。

もし、邂逅(かいこう)することになったなら。

自分は、応戦することが出来るのだろうか。

「もし基地内に潜伏していると判断された場合、もしくは近隣に敵影を確認した場合は、アラビア支部に駐屯している正規軍分隊がすぐに出動してくれるそうです」

「神機使いに通用すると思いますか？　シエルさんから見て」

「……どうでしょう。〝ヴィーザル〟の現有戦力がどういったものなのか、情報が少な

い以上は分析しようがありません。ただ……」
「ただ？」
「北欧本部には有能な神機使いの他に、正規軍本隊も所属していました。数日前に挙がった報告によれば、警備隊等も全滅していたとのこと。それに加えて、モスクワの拠点を襲撃した神機使い。シックザール博士とアミエーラ陸曹の報告では、雨宮大尉らが敵と接触して数十分後、大規模な停電と電子機材の故障が相次いだということです。これまでに襲撃された拠点の被害状況、それに掛かった所要時間を考えると、殲滅力の高い部隊員が多く属していると、――月並みですが、現状ではこの程度の推測しか出来ません」
「リンドウさんとユウさんの経過って、聞きました？」
「酷いものだと、ジュリウスから連絡がありました。……失礼ですが、コウタ隊長からは？」
「何度か連絡しているんですが、詳しいところまでは教えてくれないんです。……ユウさんは、コウタ隊長の同期で一番の戦友ですから、気持ちの整理が着いてないんだと思います」
高圧電流を浴びたようだと、そういうことすらも伝え聞いただけだ。
敵情については今も詳細が判明していない。神機使いである以上、直近まではどこか

の支部に所属していたはずなのだが、出奔した名簿に該当するものがなく、経歴も遡れないというのが現状だ。

〝ヴィーザル〟の尖兵と接触したリンドウ達も昏睡状態で、しばらくは口が利けないという。

ただ一つ、その尖兵は自らを〝Ｔｈｏｒ〟と名乗った、ということだけが小さな手掛かりだ。

「トール、北欧神話の雷神。……シエルさん、何か思い当たりませんか」

「解りやすいコードネームですが、未だに身元が割れていないというのが釈然としませんね。先日の録画映像と言い、こうまであからさまだと……」

言いかけた途中で、シエルが足を止めた。

否、固まったのは一瞬で、すぐに歩を再開する。しかし言葉は続かず、黙々といつもの歩調になっている。

怪訝に思ったエリナは、

「シエルさん？」

「静かに。あと五歩です、そこで屈んでください」

そんな指示と同時に、身体の内側に隠すようなハンドサインを見せてくる。

『二時方向』

『見るな』
ちょうどシエルが顔を背けている辺りだ。方角を示しておいて目視確認するなとは矛盾している気もするが、それでエリナも察した。
一歩、何の気も無いように、奇を衒わずに踏み、
二歩、風の音が吹きすさぶ中で少しでも気配を手繰ろうとして、
三歩、盛り上がった砂丘の向こうから、小さな瞬きが目に刺さり、
四歩、そこから射止めるような殺気を感じた途端に片手を掴まれ、
五歩、えっ、と思う間にしっかりとシエルに握られた手の感触を思う間もなく、
屈むというよりは飛び出すような姿勢で、二人は砂の海にダイブした。
その一瞬の後、空気を高速で切り裂き飛翔するものと、遅れて弾かれ爆ぜたようなもの、二つの音を聞いた。遠い砂丘のほんの一部を、小さな何かがささやかに抉った。
狙撃だ。
一方、ひとまず難を逃れたエリナは、顔中砂まみれで涙目になっていた。
「ぺっぺっ！　うう、おいでなすりましたか！」
「その語形変化はどうかと思いますが……すみません、直前でいきなり。大丈夫ですか？」
伏せたままシエルが聞いてくるのを、エリナは片手で制した。恐らくチラッと光が反

射したのは狙撃銃のスコープだろう。いち早く危険を察知した彼女が緊急回避として選んだのであれば、その判断に文句を挟む余地はないと理解している。彼女が手を引いてくれなければ、今頃自分の脳髄は貫かれていたかもしれないのだ。

トレードマークのベレー帽を被り直して、二人はその場から速やかに移動した。だだっ広い砂漠に障害物など期待できない——と思いきや、この辺りは堆積した砂の隆起が大きく、位置取りを工夫すれば目隠し程度にはなってくれる。敵の銃がどれほどの性能を持つのか解らない以上、まずは自分達の居場所を眩ませるのが先決だ。

「距離三〇〇と見ましたが、どうですか？」

「より正確には三二〇ぐらいです。それと、狙撃手は神機使いではありません。探知するのが遅れた言い訳にはなりませんが」

「……それって」

「教本通りであれば、狙撃手と観測手の二人組というのがセオリーです。我々は既に敵陣の中と考えるべきでしょう」

「いや、それもそうですけど、……一般人が、私達を攻撃してきたってことですか!?」

今の狙撃は牽制ではなく、確実にこちらを害する目的で放たれた。その意志を感じるだけの殺気があった。

エリナ達の敵は〝ヴィーザル〟で、あくまで反逆する神機使いというのが事前の覚悟

だった。
　だが、シエルの『知覚』はアラガミや神機使い――つまりオラクル細胞を使用する励起（れいき）反応を探る仕組みだ。その網に引っかからないのは、オラクル細胞を有していない存在ということになる。
　シエルがそう言うのであれば、それは事実なのだろう。エリナにとってまずそれが衝撃だった。
　フェンリルに属する神機使いの、絶対的な庇護対象。それこそが存在意義であると言っても過言ではない、守るべき一般人から牙を剥かれていると。
「……私にも信じ難いですが、モニターリンクしている支部からも警告（アラート）が入りません。地表の温度からして熱源探査はあまりアテにならないのでしょう。彼らの機材を以てしても反応せず、しかし確かに攻撃が向けられたのなら、そう判断するしかありません」
「……そんな。じゃあ、どうすれば」
「無論、出来ることをするだけです。――ＦＥ―０４よりＣＰ。攻撃を受けました。我々の位置座標を正確に報告してください」
『了解……ええっ？　い、いえ、であれば駐屯軍にすぐ出撃の指示を――』
「それには及びません。あまり敵方の神経を逆撫でする行為は早計と判断します。それよりまずは、我々の位置情報を」

『りょ、了解しました』

至極真っ当に驚いている管制官には全面的に同情するが、しかしシエルは淡々と情報を要求するのみだった。この冷静な判断力には感服する他にない。どんな修羅場を潜ればこうも落ち着いていられるのだろう。

それに、この場の座標を特定することが、何に繋がるのだろうか。

「エリナさん、広域マップを出してください。あまり悠長にもしていられません」

「は、はいっ」

数秒と待たず、管制官から細かい数字の経緯が報告される。広げた地図に指を這わせ、シエルはぴたりと一点を指した。

「我々がこの位置。銃声からして敵はこの辺り。……ちょうど目的地の辺りですね。エリナさん」

「はい」

「先程の言を訂正します。狙撃手は単独です。その点を踏まえて、この状況を打破しましょう」

●

そうして、狙撃手は見た。

右目でスコープを、左目で全景を。目に負担を掛けず、かつ戦場の全体を把握する――

たことを。

——狙撃手として教えられた極意だ。そうして凝視していた方角から、突然の爆発が起きた。

と言うよりは、単に砂丘の一角が派手に巻き上げられたのだ。ジェットエンジンのようなとんでもない推進力を持つ何かが飛び出し、その暴風に煽られて、砂が撒き散らかされた。

敵が動いた。スコープで拡大するまでもない。太陽の熱線に晒されてきらびやかに反射するのは——青の槍。二人組のうち一人が飛び出してきた。

こちらの射線を嫌うように、槍使いは半円状にを回り込む軌道でこちらへ接近してきている。直線的には狙わせてくれず、おまけに連射に適さない狙撃銃では如何ともしがたい動き方をする。

一方で、槍使いの方も高速移動を継続出来るわけではないようだった。変形した槍の内部に組み込まれた推進機構は確かに爆発的なスピードと移動距離を生むようだが、長続きしない。飛翔よりも跳躍と言うべきだろう。つまり、どこかで必ず、一瞬とはいえ足が止まる。

それは向こうも理解しているようで、半円を描く途中でジグザグに軌道修正を繰り返している。

見極めれば、その瞬間を狙い撃つことはできそうだ。

――まどろっこしい。そう思いつつ、狙撃手はバレていると直感した。

派手に動き回っているのは一人だ。もう一人がいない。そう考えれば、あれは囮だとすぐに解る。

だが、本命の姿が見えない。支給されたモニター機器からも、存在するはずのもう一つの反応がすっかり消えている。

背筋に悪寒が走る。死神が音もなく近付いてきているようだ。しかしその間にも、囮役は迂回しつつ着実にこちらへ向かってきている。

どちらも無視することはできない。

ならば、と狙撃手は、己の武器を持ち替えた。

銃弾は音速を超えるが、小さく細い。その特性を単発で一点に絞り込むのではなく、無数の弾幕として叩き込むための銃。被せていた幌を剥がし、帯状に繋がれた弾倉を叩き込む。ボルトを引いて初弾を装填。

地に固定された短機関銃を、槍使いの方へ向けた。

トリガーを引く。引きっぱなしにしていれば、銃は弾を吐き出し続ける。鼓膜を絶えず突き刺すような破裂音と、身体ごと持ち上げるような反動を、ひたすらに押し殺す。

流石に面食らったのか、槍使いの軌道が接近よりも回避を重視するような動きになる。それを追いかけるように、先んじるように、狙撃手は連射をひたすらに続ける。

役目を終えた空薬莢が大量に吐き出される中、狙撃手は慣れない音と反動の奔流に揉まれながらも、必死に機を伺った。
死神に足音は無い。だが、相手は本物の死神ではない。人間離れしているとはいえ神機使いも元は人間だ。仕掛けてくるタイミングは必ずある。
——そうして、狙撃手は見た。
もはや反復横飛びと化している槍使いに数百発の弾を撃ち続け、掠りもしないやり取りは一分と経たずに終わる。
莫大な装弾数の大型マガジンが空になると同時に、手元の小型レーダーが反応した。
打ち付ける霰(あられ)のような銃声で痺れ切った鼓膜にも、その変形の音は誤魔化されなかった。
位置はよく見なかった。ただ、仕掛けてくるとしたら、と勘で判断した方向に目を向ける。
いた。
どんなカラクリで消えていたのかは謎だが、確かにそこにあった。
死神と言うには可憐に過ぎる少女が、こちらへ武器を掲げて飛びかかってくる。
抑え込まれる。抵抗できない。力の差は歴然。
事前に教え込まれた情報から、神機使いは恐るべき敵だと本能的に理解している。こ

こまで接近を許した時点で詰みだ。

だが、だからこそ、一矢報いることが自分の役目だった。

機関銃を抑え込んでいた左手に、あらかじめ握り締めていた物。掌にすっぽりと収まる、鉄製の卵のようなそれを見て、敵の少女は目を丸くした。

破片手榴弾。ピンはとっくに抜いてある。後はレバーから手を離せば、いくら神機使いといえども無傷では済まない爆破が襲いかかるだろう。もちろん自分も効果圏内だが、厭っている暇は無い。それが自分の役割だからだ。

不安定な姿勢で、それでも敵の方に放る。抑えを解かれた手榴弾のレバーが弾け飛び、空気中の酸素を吸い込むことで内部の火薬が反応し――、

その直前に、死神が空中で身を捻り、手榴弾を思い切り蹴り飛ばした。

一流サッカー選手のハットトリックのように、爪先から掬い上げ、身体強化された脚力によって、あらぬ方向へ放物線を描く。一秒後、視界の遥か外側で、それが爆発する音がした。

神機使いはなおも止まらず、蹴り抜いた姿勢をさらに転じて、落下の勢いを伴ってこちらの顔面を鷲掴む。

堅い煉瓦の足場に叩き込まれ、その衝撃によって砂が波状に飛び散った。

鼻っ柱を平らに潰され、脳を激しく揺さぶられ、狙撃手は意識を失った。

薄れていく意識の最中、音無き死神の声を聞いた。
「……終わりました。お疲れさまです、エリナさん。結果は上々ですよ」

●

結局、当初の目的地まで全力で突っ走ることになってしまった。
エリナの槍（スピア）、シエルの短剣（ショートブレード）に共通するのは、数ある神機パーツの中でも優れた速度を誇る点だ。
本体の制御機構そのものが重いことを差し引いても、武器を振るう速度や手数への連携は、戦場において大きな強みになる。手数に勝れば戦略は柔軟かつ多彩になる。一撃は軽くとも、立ち回りの選択肢こそが生還率を上げる。
それゆえに、軽さに突出したのがエリナ達の神機だ。パーツそのものの軽量化を重ね、速度を以て（もって）先陣を切るのが仕事だ。
それをよく理解しているシエルだからこその指示だった。
無線機から出されるコース通りに、ただ突っ走ること。ただそれだけのオーダー。
敵の位置を大まかに割り出せたものの、確実ではない。ただし敵は単独で潜伏しているものとする。そう判断した材料は、地図上から見て取れた。雑談しながら歩いているうちに、いつのまにか目的地が程近くなっていたのだ。狙撃手の潜伏場所はちょうどその真上だった。

〝ヴィーザル〟は脅威ではあるものの、人足については不充分であるという予測が各支部で挙がっている。人手不足はどこも同じだ。
敵は前線基地へ既に先行している。この酷暑を考えれば、見張りに割く人員は少なく抑え、まめに交代を繰り返して消耗を防ぐのがベストだろう。二人一組などと言ってはいられない。
そんな条件から、シエルはほとんど即興で作戦を練った。
狙撃というものが二人一組で運用するのが常識である中、単独でこちらに奇襲を掛けたということは、狙撃手は一人二役を担わなければならない。遠距離への確実なスナイプは大前提として、もしも、いちいち狙いを付けていては仕返されてしまうほど接近を許した時は、どうするか。
失敗したと悟った時点で逃げることが正解だが、戦場では常に正論が罷り通るわけではない。万が一のために、必ずサブウェポンの用意はあるはずだ。そして自分に地の利があるとすれば、制圧力に長けた武器を選ぶだろう。
固定機関銃。そのうんざりするほど長続きする連射音と弾丸の雨を目撃した時、エリナは自分の役目を察した。時間がないからと無理矢理叩き出されたようなものだが、これで理解した。
こちらに目を奪わせていなければならない。射撃地点に接近するシエルの存在を気

取らせてはいけない。

シエルの神機において銃身を担うパーツは、対アラガミ用に設計された狙撃タイプだった。そして彼女は、その特性もよく理解していた。

『隠密』。

アラガミの鼻や感覚器すらも欺（あざむ）き、己の姿を隠す最強の目眩まし。時折味方にすら気付かれなくなるほどのそれは、攻撃目標に己の位置を悟らせないための機能だった。

もちろん、アンブッシュに使うだけが能ではない。隠密効果が持続するのは銃形態のままで十数秒で、剣形態に変更するとすぐに解けてしまう。これを利用し、姿を消したまま敵に最接近して、何もないはずのところから飛びかかるという戦法も実に有効である。第二世代以降の神機を扱う者にとっては、この使い所の見極めが作戦の正否を分けることもある。

特にシエル・アランソンという神機使いは指折りの優秀な隊員だ。彼女が忍べば、もはや誰にも見つけられない。

手遅れになる間合いを詰めるまで時間を稼ぐこと。エリナの役割はそういうことだった。

結果として、シエルは敵の無力化に成功。自爆目的のグレネードはアドリブで蹴り飛ばし、無血での事態収束が叶った。

「……お、お疲れさまです、シエルさん。うまくいってよかった」

「エリナさんがよく動いてくれたおかげです。この人もこちらの狙いには感づいていたようですが、何とかなりました」

狙撃手は市街地の中、今にも崩れそうな建物の屋上に潜んでいた。

立派な街だったのだろうが、多分に漏れずアラガミの食欲に呑み込まれ、追い打ちのように砂漠化の波濤が押し寄せた。現在は街のほとんどが砂の下に埋まってしまっている。本来の地表は分厚く積み固まった砂の遙か下だ。

建物自体はかつての宗教に由来するものらしく、ドームの天頂には時告げの鐘を鳴らすための空間があった。狙撃手が選んだのはちょうど日陰になるポイントだ。元はそれなりの高さを誇る建築物だったろうに、もはやドーム状の天蓋部分しか露出していない。外の空気に触れている部分も、長い時間経過によって脆く風化しつつある。

エリナは相手の装備を改める。初手に用いられた大口径の狙撃銃（スナイパーライフル）、弾幕を張ったのは銃座を設えた機関銃（マシンガン）。いずれも古めかしさはなく、むしろ最近まで良くメンテナンスされた様子が見て取れる。表面の艶が違うのだ。自身の槍（オスカー）を溺愛して止まないエリナには解る。

そして、先頃にシエルが言った通りの事実が目に入る。

狙撃手はアンブッシュ用にデザートカラーの野戦服を着ていた。その右腕をシエル

が持ち上げる。
当然のように、そこに赤い腕輪は無かった。代わりに右肩に刻まれたパッチと胸元のドッグタグは、〃フェンリル〃の正規軍所属を表すものだった。
神機使いではない、ただの軍人、ただの人間だ。
ぎり、と奥歯が軋む音を立てる。
「……どういうことですか。どうしてここに軍人が」
「……気休めにもなりませんが、この人の所属はアラビア支部ではありませんね。北欧本部直轄、ドイツのものです」
「そういうことを言っているんじゃないです！　だとしても、どうして！　正規軍の人間が、どうして私達を狙うんです！」
激昂するエリナに、シエルは何も答えなかった。
不意を突く狙撃、エリナの接近を抑える制圧射撃、シエルもろとも巻き込もうとした自爆攻撃……思い返せば、それらは確かによく訓練された習熟に基づく手際だった。特に最後の手榴弾は、己の命を捨てることに一切の躊躇がないように見えた。
任務に全てを捧げる軍人としては鑑（かがみ）のような行動原理だ。だが、決して褒められたものではない。
この時代において軍人とは、神機使いに次ぐ重要戦力だ。その銃口が向けられる先は

アラガミでなくてはならない。それが人間に、ましてや同業の神機使いに向けられて良いものでは、決して有り得ない。
つまり、神機使いの他にも、正規軍内部にまで裏切り者がいるということだ。
さらには、最悪なことに、この狙撃手は捨て身の攻勢を見せた。神機使い二人を相手に、己の命を懸けた。
その捨て身が、エリナには最も痛々しかった。
戦場においてそれは最も愚かな下策だと、大切な人達に教わったからだ。
何故そんなことを。何故、そこまでのことを。
暗い感情が脳髄を滴っていく。それは酷暑の環境にあっても氷のように冷たい汗となって、背筋を伝った。
「それも充分懸念すべきことですが――」
青ざめるエリナに対して、シエルは努めて静かに言った。
「エリナさん、気付いていますか」
「何がですか!?」
「落ち着きましょう。彼の目的は我々の排除や威嚇ではなかったということです。派手に暴れられすぎました」
同時に、聞き慣れない音が二人の四方を囲んだ。

ハッとなって振り返ると、いつの間にか周囲を十名ばかりの人間が立っていた。黒光りする突撃銃が、違うことなくエリナ達に口を向けている。
　腰に溜めるような持ち方をしているのは、これもやはり銃だった。
　死角や逃げ場はどこにも無い。統一された戦闘服の集団が、年端もいかない少女に銃を向けている。目深に被られた軍帽が庇となり、その表情を伺うことは出来なかった。
ただ間違いないのは、彼らもまた、偽りの無い殺意をエリナ達に向けていること。
狙撃手の最初の一発。砂漠に広く響き渡った銃声は、味方にも隈なく届いていたことだろう。それが呼び水となった。
　さすがに身動きが取れなかった。
「そう、それでいい。様式美としては、両手を頭の後ろで組むところまでがワンセットだと思うがね」
　どこからか、若い男の声が響いた。
　軍人の輪を割くように、外套のフードを被った人間が歩み寄ってくる。
　他の軍人とは明らかに雰囲気が違う。ぴりぴりと周囲の空気が切り刻まれるような、次元の違う敵意と殺気。腰元に提げられている棒状の何かが、たまらなく嫌な存在感を放っていた。
「君達をこの状況に追い込むことが、そいつの役目だった。何のために消音器も付けて

いない狙撃銃を使ったのかといえばそういう訳だ。生き残っているとは多少驚いたが、仕事は充分だ。無駄な血を流さなかったのは僥倖（ぎょうこう）と言える。いや、それはそちらのお嬢さんの手柄か？」

「…………」

「まあいい。よく聞け、僕らは君達を今すぐ殺しはしない。代わりに抵抗は考えるな。その場合は死なない程度に痛めつけることも許可されている。五体満足で済ませたければ大人しくしていることだ」

　適度な距離を保ち、その人間はフードを取り払った。黒肌の禿頭（スキンヘッド）、目の辺りを真一文字に渡る切傷（きりきず）。閉じられた瞼の下から、確かに二人を見下ろした。

「解ったら、ついてこい。——僕らのボスがお待ちだ」

　袖から覗く右腕には、赤い腕輪。

　既に二人は、〝ヴィーザル〟の掌の上にいる。

其は善意か、悪意なりや

「神機と通信機の類は全て没収だ。それと、まあ、捕虜らしくこれもな」
　黒肌の青年が兵士に持ってこさせたのは、一抱えほどもある手枷だった。
　黒光りする鉄の塊は雷管を抜いた砲弾のような丸みがあり、ちょうど人の手がすっぽりと包まれるぐらいの穴が空いている。穴の口径はご丁寧にも、神機使いの腕輪を収められるだけの大きさがあった。
　銃の射線に囲まれている状況では嫌がるわけにもいかず、エリナとシエルは大人しく両手を差し出した。兵士が手枷を差し込むと、穴の入り口がガチンと腕輪を噛む。
　ずしりと重い鉄塊が、否応なく両手を下げさせた。
「うちの専属技師の特注品でな。壊そうと思えば出来なくもないが、あまり勧めはしない」
「というと?」
「その重さの七割は火薬と起爆装置で占められている。無理矢理に外せばセンサーが反応してたちまちドカン、だ。少なくとも装着している人間の上半身は跡形もなく吹き飛

ぶ」
　例えでも何でもなく砲弾に手を突っ込んでいるというわけだ。空恐ろしい製品説明がされてから、一行は砂の街を進み始めた。
　旧前線基地の正体は、砂に埋没した大規模シェルターだった。
　元は大型アラガミが巣にしていた大穴を偶然発見し、そこにトンネル建設と似た要領で周囲を固めて出来上がった、大きな鉄の箱だ。施工に当たった人員は日中平均気温四〇度と夜間平均気温マイナス二〇度という地獄に晒され、粉塵による呼吸器系などへの労働災害に見舞われたという。今もその遺骸は、静かな砂の丘に埋葬されている。
　ともすれば見落としてしまいそうなところにぽっかりと空いた横穴から階段が伸び、エリナ達は黙々と地下へ向かった。明かりに乏しく、踏み外しそうになる足下を、何とか一段ずつ降りていった。
　気の遠くなるような階段が終わると、広い吹き抜けの空間に出た。
　作戦基地の核だとエリナは見る。
　大きなデスクの上、広げられた砂漠の地図には無数の書き込みが這い回り、それらを覆い被すように雑多な書類がぶちまけられている。呆れる量の無線装置や、蹴り倒されたままのパイプ椅子などがあちこちに散っている。空間を照らす明かりは、それらの足下に転々と置かれたＬＥＤランプだけだった。

全員の靴音が固く反響する。集団の先頭を歩いていた〃ヴィーザル〃の青年は、地図を広げたデスクに近寄っていく。
よく見ると、そのデスクに足を乗せている一人の大男がいた。
「トール、目標を連れてきた。ボスはどこだ？」
「…………」
「トール？　……おいコラ起きろ、寝てんじゃやねぇデブ」
見かけによらず静かな寝息を立てていた男は、青年の容赦ない鉄拳を脳天に食らって飛び起きた。
唖然としながら見守る他にないエリナの目の前で、大男は寝ぼけながら周囲を見回した。
「ぅおお？　お、おおぅ、〃ヘズ〃。敵襲か？」
「侵入者を連れてくると五分前に言ったばかりのはずだが？　いよいよ役に立たなくなってきたか、その粗末な脳味噌は」
「寝起きの人間に対するテンションじゃねぇなあ、お前。起き抜けに拳骨ってどうなのよ。モーニングコールってのはもっとこう、トーストとコーヒーを両手に恋人が優しく起こすようにだな……」
「今すぐそのフザケたツラを胴体から切り離してやろうか。そうか、随分長く待ちわび

たが、ようやくお前をこの手に掛けることが出来るわけだ」
「まあ待て。それはもうちょい後のお楽しみだ。――で？」
「ボスは、どこだって、言ってんだよ」
こちらには背を向けているが、青年の一言一句全てに青筋が立っているのが感じられる。同じ〃ヴィーザル〃の仲間ではないのだろうか。気に入らない隊員への当たりの強さはエリナ自身にも覚えがあるが、この二人はよほど反りが合わないらしい。
……というか、とエリナは思い返す。
「トール……？　あなた、まさか」
「あん？　なんだいお嬢ちゃん、このハンサムフェイスに見覚えが？　どこで会ったか知らないが、まだ俺の対象年齢ではないなぁ。もっと胸とか尻とか成長しないと俺のお相手は務まらないぜ。そう、そっちの姉ちゃんぐらいでやっとだ」
「その減らず口を閉じろ。お前を先に始末してしまいそうだ」
〃ヘズ〃と呼ばれた青年の堪忍袋は今にも爆発四散してしまいそうで、仲が良いのか悪いのか、どういう部隊なんだと思わなくもない。
話を逸らされそうになるが、エリナもシエルも、トールという名前には反応せざるを得なかった。
雷神の名を騙る〃ヴィーザル〃の尖兵。ロシアにて雨宮リンドウと神薙ユウを伏

せったという、数少ない手がかり。
その張本人だというのか。
「はン、その様子だとオレはもう指名手配っぽいな。だが素性までは明かせていないってところか？」
「……何故、そう思うのですか？」
「知っているなら、その程度のリアクションじゃ済まないだろうからよ。こりゃ本部潰したのが想像以上に効いてるな。うちのボスはそこまで考えてると思うかい、ええ？　ヘズよ？」
「さあ。考えていてもおかしくはないと思う。なにせ千里眼とか言われていたからね」
「違いねぇ。――こないだ片付けた部屋があるだろ。あいつはそっちだ」
「とっとと言えってんだデブ」
止めとばかりに椅子を思い切り蹴り倒し、トールがひっくり返って沈黙した。
さて、と振り返ったヘズは、
「そういうことだ。槍持ちは隊長の部屋へ。短剣持ちはこっちだ。早くしろ」
「なっ……」
合図と同時に軍人達が分割して動き始め、エリナとシエルを引き剥がした。それぞれ別方向に強制連行されそうになることへ異議を唱えようとしたが、後頭部にゴリッと固

い銃口を当てられ、噛み殺す他になかった。
支給された無線機の類は残らず没収され、アラビア支部へＳＯＳを送ることもできない。定時連絡がない時点で異常を察知してくれるだろうが、応援が来るまでどれほどの時間がかかることか。
孤立無援。まんまと敵の術中にハマっているような気分だ。こんな窮地はいつぶりだろう。
大の男に囲まれつつ歩いていくと、程なくして無骨な扉が目の前に現れた。先頭の男がノックを数回、間を置かずに内側から返答。
「入れ」
建て付けが悪いのか油を差していないのか、蝶番が不快な軋みを立てつつドアが開かれる。先に中へ入った男が、室内の人物へ最敬礼を示し、その後にエリナの背が乱暴に押された。
広くはないが、何もない部屋だった。天井から吊り下げられた粗末な電球、中央には向かい合った椅子が二脚。その片方に、これもまた若い男が一人、座っている。
顔立ちは北欧系だ。その割に珍しい黒髪には何本かの若白髪が見え隠れしている。
年頃は離れていないと思うが、細められた三白眼からはそう思わせない落ち着きがある。

とても静かな男だと、そう思う。

ここまで連行してきた軍人連中はそそくさと部屋を後にし、外側から施錠した。この男の指示なのだろう。小さな覗き窓の向こうから、何人かが興味深そうにこちらを見てくる。

二人きりとなった室内で、初めに男が声を発した。

「座ってくれ。楽にしていい」

男は静かに笑い、向かいの椅子を指し示した。

何の変哲もないパイプ椅子だ。座面の裏に爆弾でも仕掛けられているかと思ったが、そんなこともない。どのみち、武装の何もかもを奪われたエリナにはどうすることもできない。大人しく従うことにした。

ぎし、と椅子の関節が軋む。対等の目線で向かい合って、エリナはようやくその男が神機使いであると知った。

腕輪を填められた手を組み、男は語りかける。

「初めまして、極東の神機使い。日の昇る最果てから遥々ようこそ。手荒な歓迎で済まなかった。

改めて自己紹介をしよう。俺達は〝ヴィーザル〟。俺は一応トップということになっている。〝オーディン〟とでも呼んでくれ。君の名は?」

●

逃げ場のない密室の中で、エリナは目前の男こそが首魁だと理解した。

外の隊員達の態度が明らかに違うこと、〝ヘズ〟がボスと呼んでいたこと、予測していた中で最も大仰なコードネーム、そして何よりも、この特有の静けさがそう思わせた。

幾多の戦場を潜り抜け、生き延びた者にしか発することの出来ない、静かな重圧。

嫌な汗が伝う中、エリナは嗄れた喉から精一杯に絞り出した。

「……エリナ。エリナ・デア＝フォーゲルヴァイデ」

「フォーゲルヴァイデ？　あの財閥のご令嬢か。これは重ね重ね不躾な真似をした。なにぶんむさ苦しい男所帯なものでね。女性の隊員もいないことはないんだが、手段を選んでいる暇がなかった」

しかし、とオーディンは言った。

「そんなお嬢様が何故こんな戦場に？　フェンリルに対して指折りの貢献者であるフォーゲルヴァイデが、今更その名に箔を付けるためでもないだろう」

「…………」

「だんまりでは面白くない。ヘズが言っていなかったか？　俺は君達と話をしたくて、ここに連れてきたんだ。それとも、アラビア支部のへっぴり腰どもが救援に来るのを待っているのか？」

薄々解っていたことをはっきり言われた。
エリナは歯咬みを強め、必死にこの場を切り抜ける方法を考え続けていた。
アラビア支部からの助勢は確かに期待できない。経緯は不明だが、〝ヴィーザル〟は訓練された軍人を抱えており、その実力は申し分ない練度にある。所属の異なる軍人同士がぶつかればそれこそ戦争状態だ。敵の規模が正確に計れていない段階での武力衝突は、藪から蛇を出すことになる。だからこそ、本来は外賓であるエリナ達が拘束されても、迂闊に手は出せない。支部の指揮官が短絡的でないことを願うばかりだ。
フェンリルが慎重にならざるを得ないと、この男もそう理解しているということだろう。
救援を望めないならば、自分で何とかするしかない。しかしどうすればいい。相棒のシエルと分断されたのは痛手だ。枷は身動きを制限するだけの重量があり、爆弾であるということも方便ではないのだろう。
焦って暴れることだけは禁物だ。それは今までの現場でよく痛感している。
であれば、自分に出来ることは何か。
……今すぐに手を下される気配は無い。そのつもりがあるならば、地上で囲まれた時点で蜂の巣にされていただろう。
嘆息して、エリナは椅子の背もたれに身を預けた。安っぽい骨組みが軋む音を立て、

オーディンの笑みが深くなる。その様子に腹が立つ。
今はこいつのお喋りに付き合うしかない。いつになるかは解らないが、隙を窺う他に無い。
そうしてエリナも口を開いた。先の質問は概ね無視することにする。
「……何が目的で、私達を生かすの？　こんな大袈裟な道具まで出して、する事がお喋りだけ？」
「うむ、まさにその通り。俺は君達と話をしたかった、ただそれだけさ。情報交換会とでも思ってくれればいい。こんな殺風景なサロンで申し訳ないがね」
「は？」
「君は極東の代表としてこの中東にまで飛ばされたのだろう？　君だけではない、東側の各支部はユーラシア大陸を縦断するように監視の網を広げている。俺達〝ヴィーザル〟の尻尾を掴むために。であれば、これは千載一遇のチャンスではないか？」
こちら側の動きが漏れている。そのことにも驚いたが、何よりエリナは、自分の両肩が急に重くなるような圧力を感じた。
極東の代表。そして目の前の男は、〝ヴィーザル〟の首魁。この部屋で誰が対峙しているのか、その意味をようやく悟ったようだった。
こちらからは手が出せず、しかし敵に害意は無いのなら、せめて多くの情報を持ち帰

らなければならない。

事実、北欧本部が陥落したことで、極東支部も少なからぬ負担を受けている。通常任務ですら手が足りないというのに、各支部との平時よりも綿密な連携を余儀なくされた今、指令塔である榊も思うように動けないのが現状だ。

無様に捕まっただけでは終われない。これからの対策を練るに有用な何かを掴めるかもしれない。それを持ち帰るのが自分の仕事だ。

この手の空中戦はそれこそシエルの方が得意だろうが、この場にいるのは自分だ。

腹を括るしかない。これも任務だ。

だが、それを承知したところで、それを促す目的が解らない。

「ふざけてるの？　あんた達はこの数日でいくつものハイヴを潰し、その場に居合わせた神機使いを殺した。極東支部だけでなく、フェンリルは〝ヴィーザル〟とかいうテロリスト集団を討つべき敵と捉えている。そんな連中を相手に情報交換ですって？」

「物怖じしない若さは大変結構だが、まあ、どう捉えるも君の勝手だ。だがな、いいか？

話の展開次第では、俺達の情報と目的を聞かせてやってもいいと言っているのさ」

「もう一度聞くわ。何のために？」

「遅過ぎるからだ。フェンリル、お前達は昔から何もかもが遅い」

言葉を切り、オーディンもパイプ椅子に深く座り直した。

「たかが矮小なテロリストでしかない俺達の身元を割り、居場所を特定して攻勢に出るまでに一体どれだけ時間をかけている？　その様子ではこちらが何を目的に動いているのかも分かっていないのだろう。本部のサーバーを壊したのは確かに俺達だが、たかがサルベージにすら手間取っているのか？　そんなことだから現場に不満が溜まるんだ」

「……どういうこと？　それじゃぁ、まるで……」

彼らは自称にしろ他称にしろ、一貫してコードネームを使っていた。名前そのものに秘匿性があるのかは謎だが――否、それにしても、北欧神話の主要な神の名を騙るのは安直に過ぎる。あんな大仰な名前を、冗談ならともかく真面目に自身の代名詞として使うなど、面の皮が厚いにも程がある。

コードネームというよりは、通り名なのか。

そうであれば、まるで。

「まるで、見つけてもらいたがっているようだ。そうは思わないか？」

見透かしたように男が言った。エリナの様子を見て、意を得たりとばかりにニヤニヤと笑う。この〝ヴィーザル〟という集団は、どうも他人を虚仮にして面白がっているきらいがあるようにしか思えない。先のトールという男からもそんな気配がした。

オーディンは居住まいを正し、

「意味のある時間にしよう。俺は俺達の話をする。そして記録を仲間の元に持ち帰るんだ。それこそ俺達には望むところだと、話が終わる頃には君にも納得してくれていることだろう」

だから、彼は言った。

「世界が終わると、考えたことはあるか？」

●

「……世界が、終わる？」

「そうだ。徒に世論を掻き乱そうとする妄言ではない、現実の問題として、それを捉えたことはあるか？」

唐突に始まったスケールの大きさに面を食らったが、付き合うしかないと決めた以上、その意味をエリナも考える。

それは、この時代に生きる人間にとって、常に隣り合わせにある題目と言える。何せ自分は神機使いであり、その神機を使う目的は、

「アラガミのことを言っているの？」

人類の天敵、秩序の破壊者、滅びをもたらす荒ぶる神。色々な呼び方はあるが、あの存在こそまさに世も末といった体現であろう。

しかし、オーディンは首を振った。

「それは問題の一部に過ぎない。問題は、そもそも何故そのアラガミ、オラクル細胞などというものが表に出てきたのか、だ。太古から存在していたのか、それとも宇宙から飛来したのか。それらを考えたことはあるか？」
「無いわよ。座学では一通り履修したけど、私は考古学者になりたいわけじゃなかったから」
「そうだな。俺も一緒だ。倒すべき敵の方が多かった。そんなことを考える暇など無かった」
オーディンは、無意識にか、右腕の赤い腕輪をさすった。
「順を立てて話すとしよう。フォーゲルヴァイデ、君も、そして俺も、共通点は〝神機使い〟であるということだ。そうだな？」
「……それが？」
「では、神機使いの定義は何だ？」
それは、とエリナは答えた。
「神機を扱える者。アラガミと戦える者。そうして、人々を守る者」
「フェンリルの広告を鵜呑みにして育ってきたな。だがそれも間違いではない。では、俺達がその神機を扱える、そのように成り立つ要因は何か？　ヒントは俺と君の右腕にある」

「……腕輪？　いや、そうじゃなくて……偏食因子のこと？」
「そうだ。それこそが、俺達を人でなしにしている因縁だ」
人でなし。彼は吐き捨てるようにそう言った。
神機使いになるには、まず適合検査を受け、偏食因子と適合率の高い者としてピックアップされる必要がある。ここで用いられる偏食因子とは、アラガミの『好き嫌い』を誘導する物質——本来人間の体内には含まれていないゲノムだ。
薬物の投与に副作用があるように、この偏食因子も相応のリスクがある。適合さえすれば人知を越えた身体能力を得るが、そうでなければ、逆に喰われる。
神機とは、人間の技術によって抑えられたアラガミだ。それを振るう人間もまた、尋常のままでは身体が耐えられない。それを克服するために、身体の内側から徐々に改造を施していく。そのために偏食因子投与という実施されている。
数々の失敗と尊い犠牲を経た上で、現在では安全性も高まっているものの、これが最初の難関と言えるだろう。なにしろヒトではないものを身体に受け入れるのだから。
その点では、神機使いは常人ではない。戦闘のために改造されているのだから。
だが、
「望まずに神機使いになる人なんていないわ。適合検査のピックアップは無差別だけど、最終的にフェンリルへ加入するかは本人の意思が尊重される。誰もが望んで神機使

いになった」
「君は望んでこの道を選んだようだな。しかし今の時代、フェンリルの軍門へ下る以外に選べる仕事などたかが知れている。せいぜいが技術系の裏方仕事か。おまけに、慢性的な人員不足と言えども管理できる人員にも報酬のリソースにも限りがある。あぶれた連中は僻地送りだ。それを知らないわけではないだろう?」
「そのためのサテライト拠点よ。支部直下の居住域に入れない人々のために〝クレイドル〟は頑張ってる。それをあんた達は、リンドウさんを、ユウさんを……!!」
ロシアで意識不明の重体となった彼らを知らないエリナではない。どちらも尊敬する先輩であり、極東にその者有りとされた比類無き実力者だ。何よりも、あの独立支援部隊設立を唱えたのは彼らに端を発するという。
誰もが安心して眠れる揺りかごをつくるために。
そのために先陣を切って行動する彼らは、後輩であるエリナにとっても誉れだ。
それを、この連中は、よく解らない目的のために。
椅子を蹴り飛ばし、エリナは激昂した。
「そっちがその気なら遠慮なく聞かせてもらうわ。同じように望んで神機使いになったあんた達が、どんな大義があって同士を殺すってのよ!」
「これからの時代に神機使いは不要になる。そのためだ」

対して、オーディンは落ち着き払ったまま言い切った。
「その通り、俺も、他の隊員も、望んで神機使いとなった。ただの軍人もいるがね。だが誰もが俺の思想に賛同して、この作戦に臨んでくれている。俺達は、これからの時代を憂うからこそ、神機使いを殺す」
「答えになってない！　その理由が何なんだって聞いてんのよ！」
「神機使いも、アラガミも、大差ない怪物だからだよ」
まあ座れ、とオーディンは促した。
エリナはそのまま立っていた。
「俺達が神機使いで在り続けるために必要なことは何だ？　神機使いにおける日常的なメンテナンスにおいて必要なことは何か、解るか？」
「……偏食因子の定期的な投与」
「それを怠ると、どうなる？」
「…………」
フェンリルという組織が長く秘匿してきたことだが、最近になってからは誰でも小耳に挟むぐらいはしていることだ。当然ながら、エリナも知らないわけではない。そうなった人物が身近にいるからだ。
アラガミ化。

文字通り、神機使いがアラガミに化けるという現象。
神機使いの人体に組み込まれた偏食因子は、定期的に繰り返し投与を受けなければならないとされている。接種量は厳密な定義を確立されており、多くても少なくてもいけない。腕輪はそのための役目も果たしている。これを失った神機使いは、そう時を待たずに〝崩壊〟する。
雨宮リンドウは、とある作戦中にその危機に瀕した。いくつもの幸運と奇跡が重なって現在に至るものの、大抵は悲惨な末路を辿るという。
だが、
「現行の神機使いには何重もセーフティが組み込まれてる。一昔前ならともかく、今は安全と言える水準にまで技術は達してるわ」
「そうか。君はまだ地獄を見ていないのだな」
「…………」
「青二才はまだ知らなくても良い。だが、いずれは見せつけられる地獄だ。情報管理局の連中は毎日のように見ている地獄だ。戦場では必ずしも満足な補給を受けられるとは限らない。俺達は神機ばかりか、身体の中にまで怪物を飼っている。腹を空かせれば持ち主ごと喰らうような怪物を。まずはそれを自覚しなければならない」
「だから殺すって言うの？　定期的に投与を受けてさえいればその心配は無いってこと

は、引退した神機使いが生存していることが証明してる！」
「そう。あらゆる物資は有限だが、あれはアラガミから千切り取れば済むものだからな。半永久的な供給は可能だろう」
　しかし、とオーディンは言った。
「それはアラガミが野放しになっている現状を是とする理屈だ。いつ、どこで悲劇が起こるかも解らない理不尽な世界を、そのままで良いと目を逸らす行為だ。アラガミがいなければ神機使いは死ぬ。滅ぼすべき敵を無くして、我々は生き永らえることすらできない。そんな依存をいつまで続ける？」
「……それは……」
「俺はそんなものは御免だ。だから俺達は、この血を受け入れた同士すらも救う。作戦通りに事が進めば、神機使いは必要ではなくなる」
　言っていることは解る。大義として筋は通っているのだろう。だが、解らないのはその方法だ。
「どうやって。神機使いがいなくなれば、それこそアラガミに対抗する手段が無くなる。既存の兵器ではアレを殺し切れない。それこそ人類は今度こそ滅亡する」
　どんな筋道を見出して、彼らは行動しているのか。
　エリナの問いに、オーディンは答えるでもなく、また語り始めた。

「神機使いという存在そのものにリスクがあり、しかし無くてはならない武器であるからこそ、神機使いは廃業しない。そこまでは理解したな？　では話を初めに戻すとしよう。――世界が終わる原因に何がある？」

「……アラガミ化が直接の原因になるってこと？」

「いいや、それは一端に過ぎない。世界終焉へ至るシナリオというもの自体が多岐に分かれる。もっともどんな道を辿ろうが最終的にはオラクルに滅ぼされるがね」

「終末捕喰……」

「そう。世界の再生プログラム、生物進化の袋小路に用意されたやり直し。オラクル細胞が発見されたのは二十一世紀も末に迫った頃だという。――つまるところアラガミとは、この終末捕喰へと段階的に事を運ぶためのシステムの一環だと、多くの有識者が公表している」

そもそもが与太話として一蹴された終末思想だ。天変地異が長く続くとこのような話が市井に流布するのはよくあることである。だが、近年中に発生した諸々の事件から、決して酔狂ではないと重要視されるようになった。

実のところ、極東では少なくとも二回、その危機に瀕している。それも人為的に、だ。

アラガミは惑星上の既存物質を分け隔てなく捕喰するが、その性質はアラガミ同士にも及ぶ。アラガミ同士が共食いする現象は、昔から幾度も観測されてきた。

共食いを繰り返したアラガミは細胞ごと組み替えるような変質を遂げ、より強力な個体に進化する。昨今は特に変異体の目撃情報が急増しており、ベテランの神機使いでも手を焼く任務が多い。

そして、終末思想の概要とは、その変質を最終段階まで高めた上位個体――〝ノヴァ〟と呼ばれる完成系が引き起こすものだと言われている。

これを人為的に創造しようと企んだ者達がいた。

極東支部近海の人工浮遊島〝エイジス〟では、前支部長ヨハネス・フォン・シックザールが。

極致化技術開発局の移動要塞〝フライア〟では、あの〝ブラッド〟を創設したラケル・クラウディウスが。

前者の時分のエリナはまだ幼かったが、後者の事件はつい一年ほど前にようやく収束の兆しを見せたばかりだ。副次的に発生した〝螺旋の樹〟の一件以来、しばらくは本部の査問委員会が極東支部関係者を残らず掴まえては事情聴取を繰り返し、エリナもそれに巻き込まれた身である。

「……それがどう繋がるの？　まさか自分達で起こしてやろうとでも言うつもり？」

「だとしたら？」

「あれはただの神機使いが数人集まって頑張ったところで起こせるものじゃない。組織

単位のリソースと長い時間をかけて、ようやく人為的に引き起こしたの。それも全て失敗に終わっている」
「ある程度の事情は知っているようだな。それは結構。――その通り。どれだけ古巣でもてはやされていようとも、結局やれることは限られている。神機使いは駒でしかなく、アラガミを討つことが仕事だ」
膝の上に乗った腕輪をさすりながら、オーディンは言う。
「俺に限っては十代の頃に適性検査を通って以来だから、かれこれ戦歴は十年以上になる。これまでに色々な戦場を渡り歩いた。うんざりするほどに。だが、最近になって一息を着けたからこそ、その意味を考えられるようになった。殺しても殺してもどこからか湧いてくるアラガミどもを、数えるのも面倒になるほどに殺してきた意味は何なのか」
単刀直入に言えば、と、溜息のような息継ぎを挟み、
「まったく無意味だった」
「…………」
「一個体のアラガミを行動不能に追い込んだところで、時間が経過すれば霧散したオラクルが再結集し新たなアラガミとなる、そのサイクルのことではない。オウガテイルだろうとハンニバルだろうと、個体の討伐難易度など些末な問題に過ぎなかった。それら

を討伐することは、人類の生存を長引かせる以上の意味は無い。もっと大きな視点が必要だった」

接触禁忌種と呼ばれる危険なアラガミすらも些事であると、目の前の男は言った。

例え小型であろうともアラガミである以上、その脅威に変わりは無い。人が死ぬ可能性があるのなら、それは危険だ。制御はできず、問答無用で襲いかかってくる。侮った人間から先に死ぬ。エリナは少なからずその惨状を見てきた。

力及ばず命を落とした人達を愚弄されたようで、ふつふつと沸き上がる怒りを抑えながら、しかしエリナは、このオーディンという男は決してアラガミを侮っているわけではないと感じる。十年以上も生きながらえているベテランの言であれば、それはその人なりの哲学なのだろう。

戦うことに疲れた、という様子でもない。無駄だと悟っていて、それでもなお諦めたという様子でもない。

オーディンはそのまま語り続けた。

「いつか言ったたな。俺達には時間が無い、俺達は気の長い性分ではないと。本当ならこんな風にだらだらと喋っていることすら勿体無いぐらいに、状況は逼迫している」

「その割りには随分面白そうに話してるように見えるけど?」

「あまりこの手の話に付き合ってくれる奴がいないもんでね。ヘズが選んで寄越したの

が君なら、多少は楽しめると思っている」
　無作為に引き剥がしたわけではないらしい。自分が選ばれた理由がよく解らないが、ともあれエリナは「あっそ」と話の続きを促した。
「本気で、そのつもりなの？」
「誤解しているようだがな、俺達は破壊者ではあるが、ただ滅ぼすだけで手放すつもりではない。シックザールもクラウディウスも、ただそれだけで事を起こしたのではない。己の理想を遂げるために必要だから、それに着手しただけだ」
「同じよ。己の理想のために犠牲を肯定する奴なんか、みんな悪党だわ。どんな大義名分があろうと関係ない」
「そう、俺達は畜生にも劣る極悪人だ。そうでなければ成し得ない理想もある。生命を根絶やしにすることなく、人類を救済する。この怪物が蔓延る地獄を、元の在るべき形に戻す。この道筋は、ただ善人であるままでは成し得ない」
　例の映像でも言っていたことだ。
　終末捕喰の引き起こすこと自体は否定しない。だが、それだけではない。
　絶対的な滅亡を引き起こす最終手段すら途中経過でしかない。
　ならば、その先には何がある？
「そもそも終末捕喰のトリガーたる〝ノヴァ〟の発生は人為的とは限らない。あれは世

界のエコシステムで、どこででも起こり得ることだ。では世界が滅ぶのはいつだ？　数百年後かもしれないし、明日になるかもしれない。次の瞬間にも滅びは起きるかもしれない。まるで導火線に火を点けた爆弾だ。いつ吹っ飛ぶかも解らない爆弾の上で俺達は暮らしている」

「だから、時間が無い、と？」

「そうだ。では、最悪の結末を避ける方法は何だ？　無論、起爆しないよう努めること。または起爆したとしても、その余波を可能な限り外に漏らさないこと」

「臭いモノには蓋ってわけ？」

「――ふ、ふ」

たまらず、といった様子でオーディンが吹き出した。

「……何がおかしいの？」

「いや、なかなか話が早い。ここまで想定通りに受け答えしてくれると気持ちがいい」

「馬鹿にしてるわね」

「まさか。将来有望だよ。ほんの少し縁があれば、君もこちら側にいただろうに」

「冗談じゃない。誰が人殺しに荷担するもんですか」

「そう言うな。君はもう答えに辿り着いたぞ。それこそが我々の最終目標だ」

口元を押さえ、肩を小刻みに震わせながら、オーディンは続けた。

「蓋をする。まったくその通りだ。そしてその希望は既に見えている。君の方がよく知っているんじゃないか？　極東で毎日戦っている君であれば、その方法が」

その言葉に、エリナはほんの僅かに逡巡する。

オラクルを止める希望。極東の所属である自分が知る希望。

すぐに思い至る。

それは、

「………………〝聖域〟」

「そうだ」

オーディンも短く首肯した。

〝終末捕喰〟という世界を滅亡させる最終フェーズが、多くの精鋭によって止められた成果。

因果が絡み合って出来上がった〝螺旋の樹〟が崩壊し、その跡地には信じられないほどの草花が息吹いていた。

普段から鉄と油にまみれ荒廃し切った世界に慣れている身としては、まさに世界を作り直した夢のような光景が広がっている。情報管理局の声明では、あれこそがアラガミの出現する前の時代を再現したものであるらしい。

その土地が聖域と呼ばれる所以は他にもある。あの一帯においては、アラガミを含め

たオラクル細胞の機能が完全停止する。
一部のアラガミが発する特殊な偏食場と類似した効果と予測はされているが、詳細なメカニズムまでは現在調査中だ。何であれ解っていることは、この世界で唯一アラガミが入り込めず、オラクル技術の塊である神機も例外なく使えなくなるということ。
現在は管轄を〝ブラッド〟に任されており、生態系の観察や環境整備を行なっている。苦労して建てたログハウスや、土から作った畑などは、立ち入りを許された人間の心を癒すスポットとして大事にされている。
外敵を寄せ付けない絶対不可侵。怪物のいない穏やかな世界。誰もが夢見た楽園。
それを今、引き合いに出す意味は。
「……馬鹿馬鹿しい。そんなことのために人を殺したっての!?」
何が目的かなど、話の流れで大方は察している。問題なのは、その方法だ。
対して、オーディンは幾度も話してきたような慣れた口調で言った。
「全世界に聖域を拡散する。世界の在るべき姿を取り戻すには、これしかない」

●

「出来るわけない」
オーディンの言葉を聞いて、エリナは一蹴した。
しかしその返しは彼の方も予測していたようで、即座に二の句が継がれる。

「〝螺旋の樹〟が崩壊した跡地、その〝聖域〟。あれこそまさに人類の希望だ。君達が成し得た奇跡こそが鍵となる。我々〝ヴィーザル〟は、あの聖域を敷き詰める。一部の隙間も残さず、世界中に新たな土壌を上書きする」
「出来るわけがない！　あれは奇跡の産物よ、そう簡単に複製できるものならとっくにやってる！　なんで極東が慎重にやってるか解ってないの⁉」
「解らんね。極東の諺でも〝善は急げ〟と言うだろう。今すぐにも為すべきだというのに、なんとも役人どもに保守派の多いことか。実地調査の必要性は認めるが、せめて拡張の可能性追求も同時進行するべきだとは思わないか？」
「やってるわよ！　だけど迂闊に触れるべきではないと現場が判断して、榊博士もその指針で承認している！　そもそも成立のプロセスすらはっきりと解明できてるわけじゃないのに、そこらの神機使いが数人集まってどうこうできる代物じゃないのよ、それも解らないの⁉」
「複数の終末捕喰が同時に起こり、それらを共食いさせることで自らを停止させる。然る後に特異点そのものを破壊する。簡単なことだ」
　エリナの激昂もそこで止まった。
　それは最上級の機密事項だ。そこまで知っているのか。
　自身を落ち着けるように、オーディンは嘆息して言った。

「支部外秘とはいえ、本部にまで隠し立てるわけにもいかないだろう。ある程度の権限があれば閲覧できる記録だ。これでも北欧ではちょっとしたものだったのでね」
「……そこまで知ってるなら、解るでしょ。聖域の発生には終末捕喰のプロセスが外せない」
「そうだな。楽園を生み出すためには、まず世界を滅ぼす危機に瀕しなければならない。皮肉なものだ」
目の前の男は、何とも感じていないように言う。
「それがどうした。虎穴に入らずんば虎児を得ず。リスクに怯えていては勝利することも出来ない。我々神機使いは、戦場において常々直面していると思うが？」
実力が上がるほどに無茶な作戦や難題を突きつけられる。まさに生死を行き来するような理不尽が当たり前のように存在する。
だが神機使いとは、困難を打ち破る仕事だ。そうでなければならないからだ。怖じ気づいて退けば、多くの命が奪われる。だからこそ、かかる困難には自ら進んでいかなければならない。
そうでなければ、勝利はないからだ。
——それとこれとは話が別だ。
皮肉ではない。その二つは天秤に乗せるべきものでもない。

この時代において、ハイリスク・ハイリターンなど、端から破滅しか用意されていない。

何より怖気を誘うのは、最悪のケースを想定していないかのような口振りだ。

ややあってからオーディンは立ち上がり、部屋の隅へと歩いていく。明かりの届かない場所で何やらごそごそとまさぐり、卓上灯をぽつと点けた。そこにちょっとしたサイドテーブルがあったのだと、エリナは初めて見た。

丈夫な作りの電気ケトルと、カップがいくつか。インスタントコーヒーの瓶を開けて、カップの一つに雑に粉末を落としていく。

「さて、思いの外盛り上がったな。喉は渇かないか？　思えば砂漠を行軍してからここまで水分補給もしていないだろう。この通りコーヒーしか用意していないが」

「……誰が飲むか」

「毒など盛ってないんだがね。では気分転換にラジオでも聴こう。気が利くＤＪが少ないのが難点だが、たまに掘り出し物があったりもする」

同じく卓上に置かれていたプレーヤーとスピーカーにスイッチを入れる。ここは砂に埋もれた地下で電波など届くはずもないが、よく見ると長いケーブルが部屋の隅を伝っている。有線で受信できる仕組みなのだろう。

とてもそんな気分ではない。聞かねばならないことは山のように残っている。

「ふざけないで。聞かせなさいよ、そんなリスクに賭けようなんて何考えてんのよ！　あんたが言ってるのはただのテロリズムよ！」

リスクを背負ってまで実現しなければならないリターンはあるのだろう。

聖域の拡散とは、つまり事実上、世界中からアラガミの脅威が無くなるということ。それそのものは賞賛すべき思想だ。

だが、そのために支払う代償が大きすぎる。

成功すれば御の字だろう。だがその失敗は、即ち世界の滅びだ。

先人達が積み重ねてきた偉業と奇跡によって幾度となく救われては辛くも繋がれてきた未来までもが、今度こそ喰い尽くされる。

「世界を救うために、全人類が喰い殺されてもいいってわけ!?」

「静かに」

オーディンは答えず、エリナを黙らせた。丸いツマミを慎重に動かしていく。

「ラジオが聞こえない。この時間はちょうどニュース番組なんだ」

音量が上がり、耳障りな砂嵐が部屋中に満ちていく。チューナーを徐々に回していきながら、目当てのチャンネルに寄せていく。雑音の中から、人の声が明瞭に浮かび出てくる。

丁度良いタイミングだったのだろう。その第一声に、エリナは否応なしに黙らされ

た。
『臨時ニュースです』
　ＦＢＣでも馴染みのある女性キャスターの声だ。テレビ放送と同じ音声をラジオの電波にも乗せているのだろう。普段の落ち着き払った様子が耳心地良いというのに、彼女は酷く焦っているようだった。
『――世界各地で暴動が巻き起こっています。情報によりますと、イギリス、イタリア、ロシア、パキスタン、中国、台湾、以下多数のフェンリル支部周辺にて同時テロが発生。死傷者は多数にのぼると見られ、フェンリルは一連の事件を、先日公共放送をジャックしたテロ集団〝ヴィーザル〟の首謀によるものと判断しています。市民の皆さんは近隣の支部、または避難用シェルターへ逃げてください。現地のフェンリル職員または神機使いが誘導しています。繰り返します、世界各地で暴動が発生しています。これは訓練ではありません。市民の皆さんは一刻も早く安全な場所へ避難を――』
　ぶつん、とオーディンがスイッチを切った。それきり、狭い部屋の中を静寂が包んだ。
　部屋の中を、安っぽいコーヒーの香りが満たしていた。
　一口、二口とそれを飲んで、オーディンはようやく口を開いた。
「これが答えだ。意味が分かるか？　俺が、遅いと、そう言った意味が」
「……なに、今の」

「全世界で息を潜めていた同志達が動き出したのさ。この日、この時間、世界に火を放てと。先導しているのは神機使いだが、戦力のほとんどは民間人だ。アラガミの相手にはならずとも、人間相手であれば事足りる戦力だ」

片手をズボンのポケットに突っ込み、その中から艶消しの鉄塊を取り出した。片手に収まるサイズのそれは、フェンリルに属する正規軍がよく身につけている拳銃だった。

「こんなものでも命を殺せる。むしろ前時代においてはこれが主流だった。ただの人間はもとより、神機使いでも撃たれれば死ぬほど痛い。いくらなんでも蜂の巣になれば死ぬ。そのために与えた、力無き者のための武器だ」

テロリストを主導とした、民間人の武装蜂起。

その字面だけでも、エリナの思考は最悪なイメージを思い描いた。

まさか拳銃が主武装とは言わないだろう。自分達に奇襲をかけた兵士の装備を思い出す。同程度の武器が支給されていると考えていい。

ニュースで報じられた地域だけでも範囲が広すぎる。各支部は己の拠点防備を固めることを優先したために、地方のハイヴへ割く人員が普段よりも手薄になっている。最低限の警備しか付いていない状態だ。それでも有事の際には迅速に展開できるよう、むしろ監視の目は強めている。

だが、とエリナは想像する。

間に合わない。
最初に被害に遭ったハイヴの時と同じだ。各拠点から現場へ向かうまでにどれほどの時間がかかる？　それまでにどれだけの被害が出る？　その間にゲリラは用事を済ませてとっとと退散することだろう。
守り切れず、また、悪人に縄を掛けることも出来ない。
最悪だ。
その首謀者であるオーディンは、黙りこくったエリナに構わず喋り続けた。
「俺の友人曰く、世界とは、神の創りたもうた箱庭なんだそうだ」
「…………」
「全知全能の創造神が片手間に、暇潰しがてら創った世界。ほんの少しの神秘や奇跡を残して、神は世界を手放した。箱庭の中の群像劇を、遙かな視点で楽しむために。俺達は知性を与えられた人形に過ぎず、全てが大いなる意志に仕組まれているとも知らず、滑稽に踊るしか能のないピエロなのだと」
「…………」
「そしてアラガミは、いい加減に飽きた神が箱庭を造り直すために投入したレジストリのようなものだと。いいや、或いは人知を越えた困難を敢えて与え、醜く抵抗する人間どもの景色を楽しむためのテコ入れではないか。娯楽には新鮮さが欠かせないから、

と」

「…………」

「ならば、この非情な世界も神の設計通りなのか？　幾度ともしれないリセットが神の定めたものなのか？　人間の創造、破壊、そうして紡がれてきた歴史の全てを〝無かったことにされる〟のが前提の演目プログラムだというのか？　——そんな不条理を一体いつまで甘受し続けるつもりなんだ？　ここに生きているのは間違いなく俺達だというのに」

「だったらどうしてこんなことを起こすの」

自分でも驚くほどに、ひび割れた声が出た。

もはや聴くに堪えない。この男の言うことは全て戯言だ。矛盾の塊だ。こんなものに追従する部隊も理解できない。

崇高な目的なのだろう。これは人類の存亡を真に憂えているからこその革命なのだろう。思惑通りに事が進めば、きっと今とは違う現実に変わるのだろう。

だが。

「そもそも聖域を広めることが目的なら、神機使いを殺す必要はない。聖域の効果圏内では神機使いも力を発揮できない。……私達が常人離れしていることは認めるわ。だけど、聖域にいればただの人間になれる。あんた達の目的がアラガミのない世界だとい

うなら、わざわざコストを割いて神機使いを殺す必要はない。違う？」
「言ったろう、神機使いは恒常的な偏食因子投与がなければアラガミ化を引き起こす。その発作が聖域内でも抑制される保障はない。試す価値はあると思うが、どうせ主導には上層部の承認が要る。それこそコスト無駄だ。全滅させる方が手っとり早い」
「民間人を殺す大義は？　あんたにどれだけの統率力があるか解らないけど、武器を持った人間ってのは基本的に手が付けられないものよ。管理する側の人間から離れれば、なおさら」
「重々承知しているとも。だから、適度な教育を施してある。彼らの矛先は常にフェンリルそのものだ。関係のない人間まで殺すことはないように言い聞かせている。我々も不要な犠牲は厭う。神機使いは別だがね」
「訓練されしていれば民間人を戦場に放り込んでもいいってわけ!?　ふざけんじゃないわよ、あんた歴史に何を学んでるのよ！　新兵ですらないド素人がどれだけ武装したって戦場じゃ役に立ちゃしないわ!!」
　重い枷の存在も忘れて立ち上がり、勢い余って椅子を弾き飛ばす。もはやそれすら構わずに、掴みかかるように食らいつく。
「何が不要な犠牲は出したくないよ、同志なら見殺しにしてもいいなんて理屈のどこに正義があるのよ！　そんな口車に乗せられる奴の気が知れないわ！」

「民兵、義勇軍とはそういうものだよ。プロパガンダの旗を掲げて、己の正義を成し遂げるために突き進む。その為に武力が必要であり、命のやり取りでしか解決できないことがある。それだけだ」
「あんたらの正義とやらがどれだけご立派なのかは知ったことじゃないわ。そんなものは関係ない。今どき紛争なんかで解決できることなんか無いって言ってんの！　それもフェンリルに歯向かったところで後が続かない！　例えアラガミが消えたとしても、統率を失った民衆は混乱するだけだわ。結局あんたは未来を潰してるのよ！」
「さて、世界は幾度となく治世を欠いた時代に晒されて今に至るが、それでも人類の歴史が途切れることはなかった。いいか、未来を語るためにはまず世界という土台があることこそ大前提だ。アラガミが居る現状では滅亡の一択しかない。だが土台さえあれば人類はいくらでも再起できる。そのために必要なのが、神機使いの滅びだ」
　何故そこまで争うことに固執するのか。
　目的と手段がどうにも繋がらないように思う。交渉による解決ができないから強硬手段に出ること自体は疑問ではない。だが、それであれば人質を取るなどの賢明な方法もあったはずだ。何故神機使いが、同じ神機使いを殺すことに拘るのか。
　血の昇った脳裏を、何かが掠める。
　それは気付きと言えるほどのことではない。単にキーワードを繋げただけの、ただの

問いかけだ。
「……聖域の拡散に神機使いが必要となる理由があるってこと？」
「……ほう、一足飛びにそこへ行き着くか」
だが、オーディンは僅かに目を瞠った。
そうしてあっさりとエリナを見限るように身を翻し、部屋の出口へ向かう。
数度のノックを聴いて、外に待機していた兵士が扉を開けた。何やら耳打ちをして、一人は廊下を駆け出し、一人はエリナに近付いてきた。
「……なによ？」
「時間だ。問答は熟した。君達には一刻も早く帰還し、支部へこの件を話してもらうとしよう」
「はぁ!?」
また沸騰しかけたエリナを、兵士が後ろから羽交い締めにした。抵抗する術もなくはなかったが、両手を爆発物に突っ込んでいる現実が掠め、昇った血を冷ましながらオーディンの言葉を聴く。
「もう次のフェーズに進むということだ。君こそ、いつまでもここで呑気に構えている場合ではないぞ」
ずるずると引きずられながら、エリナは相手の顔を精一杯に睨む。一方で、オーディ

ンは薄い微笑を口元に張り付け、
「急げ、フェンリルの手先達。ここから先は本物の戦争だ。敵は怪物のみならず、同じ人間もまた敵になる。その備えを始めろ。ヒントは充分くれてやった」
「……何を、する気」
「戦争だよ。人類史上、実に一世紀ぶりの全面戦争だ。我々がこのクソッタレな世界に報いるための、最大にして最後の抵抗だ」
　間もなく施設全体に耳をつんざくアラートが響き渡った。緊急事態を告げる、嫌な警報だ。廊下に転々と回るパトランプが視界を刺激する。
「楽しい時間だった。どうも隠し事が出来ない性分のようでね、自分の目論見を誰かに話すというのは、何度やっても愉快なものだ。それが事の顛末をほのめかすようなものであれば尚のこと」
「詐欺野郎が」
　これ見よがしに唾を吐き捨て、エリナは吠えた。
「あんたが言ってるのは夢物語よ。失敗の可能性には触れずに都合のいい言葉で目を眩ませる。それで民間人を戦場に出す大義が整うってわけ？　暴徒鎮圧の目的で正規軍には発砲が許可されるのよ。やむを得ないなんて馬鹿げた理由で、あんたに誑かされた罪のない人間が死ぬ。あんたに何の権利があってそんなことが許されるってのよ！」

「君が言っただろう？　神機使いがそうであるように、我々もまた志を同じくした者ばかりだ。そうだろう」

問いかけられ、エリナを羽交い締めにしている兵士が、恭しく答える。

「は。我らヴィーザルの旗に集う同志に、死を畏れる者はおりません」

「そうだ。我々は死すら厭うことなくこの作戦を成し遂げる覚悟がある。曲がりなりにも指導者としてたっている以上、人身を鼓舞するのも俺の仕事なんでね」

「止めてやる。そのクールぶった鼻を開かしてやるわ、絶対に。関わった連中全員残らず営倉にぶち込んでやる。二度と陽の目を拝めるとは思わないことね」

「いい捨て台詞だ。その意気のまま萎むなよ青二才。戦場に立つという意味をしっかり感じるがいい。そう何度も体験できる事じゃない」

そうして兵士の肩を叩き、気楽に言った。

「見送りは丁重にな」

●

「行きましたか」

「ああ、ヘズ。お前もご苦労。そっちに行ったお嬢さん……シエル・アランソンだったか。どうだ？」

「静かに話を聞いていましたよ。拍子抜けするぐらいに大人しいもんです。そちらは随

分賑やかでしたが」
「はは、若い頃の自分を思い出したよ。上役だろうと誰にでも噛みついていた。血の気で言えばトールとそう変わらなかったな」
「あれは年食ってもあのままじゃないですか。ボスとは別枠です。……よかったんですか?」
「何がだ?」
「彼女達を生かして帰して。どちらも未熟ではありますが、いずれも脅威になりますよ。何しろ極東の屋台骨、その傘下で直々に鍛えられているんですから」
「そうだな。延び白はあるのだろう。そうでなくては俺達が困る。お前達に交わした約束を違えるわけにはいかない。奴等には本気でかかってきてくれなければ」
「貴方の悲願を阻むことにもなりかねません。万に一つも無いとは思います。しかし、もしも、その不運が起きてしまったら……」
「弱気なことを言うな、ヘズ。俺達には昔から困難ばかりが降り懸かってきた。それらに比べれば現状は呆れるほどに温(ぬる)い。これをひっくり返すほどでなければ身が入らんというものだ。そうでなければ焚きつけるような真似はしないさ」
「しかし」
「安心しろ。俺は誰にとっても幸福である結末を望む。俺達ならば万願を果たせる。何

も手放す気はない。強欲だからこその俺達だ」
「……トールと同じような事を言うんですね」
「あいつに言わせるところの本能だな。では聞くが、俺のところに彼女を移してきた理由は何だ？　俺は別に銀髪のお嬢さんでも構わなかった。どのみち明かす内容は変わらないからな」
「……あの少女が、一番声が大きかったので。そちらの方がお好みかと」
「俺と彼女が似た者同士だと直感したのではないか？」
「…………」
「まあいい。時に、姉(バルドル)から連絡はあったか？」
「上々、と。予定通り、すぐに帰還します」
「ゲリラの動きは？」
「各隊とも既に退いています。次の放送までには退くようにと。こちらもコンボイの1号車から3号車まで荷積みは完了、残存する兵達への誘導も恙無(つつがな)く」
「よし、急ごう。いよいよ忙しくなるぞ」
「ええ、……ボス」
「ん？」
「貴方を死なせはしません。無頼の僕を使ってくださった御恩、必ず報いてみせます。

僕の望みは、その途上でこそ果たせるものでしょう」
「あまり気負うなよ。トールを見習えとは言わんが、もっと余裕を構えておけ。……感謝しているよ、アーロン・ベラスケス。もう一度この眼で〝空刃〟を見られるのが楽しみだ」
「はい。――我が剣に誓って、必ずや貴方の悲願成就を」
「そうだ」
「我々は戦士、なればこそ、その死は有為でなければならん」